
生徒会室の、女王。 ~ The World Around You ~

スイーツ男子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生徒会室の、女王。〜The World Around You〜

【Nコード】

N3565R

【作者名】

スイーツ男子

【あらすじ】

『理科室の、魔王。』という作品の続編的なものです。

魔王の元に訪れる、新たな願いを持つ者。

切羽詰まった彼女の“願い”とは一体何か？

そしてそこに現れる新たな人物や立ち塞がる真の敵の影！

窮地に陥る魔王！！
その時、あの少女は……！？

注

・みたいな展開にはなりません。

軽くお暇潰しに読んで頂ければ本望？です。

女王の、誕生。(前書き)

『理科室の、魔王。』の別に待望もされていない続編です。
それでも、誰かに読んで頂いてその方の人生に一瞬でも関われば、
それだけで幸いです。

女王の、誕生。

*

風が、気持ちいい。

さらさらと頬をなでる6月の風は梅雨に入る前のまだ湿度の低い『それ』で。

衣替えしたばかりの肌には少し冷たいが、それくらいがちょうどいい。

夏にクーラーを効かせ過ぎたくらいな、あの感じ。

それは、

雨が嫌いなオレにとって憂鬱メランコリーに陥る前の、いわば最後の時間。

爽やかな気分の俺はただ、1人で空を見上げていた。

落下防止の柵の外で、

靴を脱いで、だが。

*

ぼー、っとした視線の先にあるグラウンドには誰もいない。
授業中ではあるが、今日のこの時間にはどのクラスも使っていない
ようだった。

……その方が好都合ではあったのだが。

誰かに見つかって騒ぎになるのは本望ではない。

ただひっそりと、消えようと思った。

揃えられた革靴ロウファを見、その上に遺書めいた文を残した携帯電話を置
く。

そして、眼下に広がるコンクリートを見た。

20メートル、というところだろうか。

“死ぬ”には充分だった。

……そう、“死”。

オレはそれに憧れもしない。
ただ

“生きていたくも”ないから。

だからオレは死ぬ。

その意味のない生活まじごとに終止符をうつのだ。

すう、っと息をのみこむ。

そして、倍の時間をかけて吐き出す。

……はあ。

よし、これで……。

その時、背後からガチャ…、と音がした。

それでもオレは振り返らなかった。

もう決心は揺らがないと思っていたから。

……どうせすぐ飛ぶんだ。教師を呼ぶヒマもなくすぐに……

「ねえ、その人」

「……………」

思わず返事をしてしまいそうになった。が、違う。
オレはここから……………」

「聞いている？その髪の毛の長い人」

チラリと声の方を振りかえる。
オレの知り合い…、ではなかった。それ以前に見たことのない顔だ
った。

……………誰だ。あのメガネ男は？

「……………何か？」

出来る限り平静な、拒絶する冷たい声を出して、その侵入者を見据
える。

すると相手が息を呑むのがわかった。…というより絶句、なのか。そんな顔だった。

そして急に口を開く。

「い、伊藤静さんが声をあてていそうな人ですか？」

……………。

「初対面の人間に意味不明なことを聞くのが貴様の趣味なのか？」

そう言い放つと、ヤツはバツの悪そうな顔をして。

「えー、あー…ごめん。そういう趣味はないんだけどね。」

他が、ね。と彼は言った。何が他なのか知らないが至極どうでもいい。

「……………用がないならさっさと消えてくれ。」

オレも、さっさとこの世から消えたいのだが。しかしヤツはそれに答えることもなく、

「そこつてさ、危くない？」

とぼけた事を言う。

「……そんなこと言われなくても分かっているが？」

「じゃあ、分かっているのにそこにいるのは？」

コイツ……、オレを苛立たせたいのだろうか？

「状況を見ればわかるだろう？」

そこに、ヒュウ、と一陣の風が吹き抜けた。

今までより冷たくて湿った風。

オレの嫌いな、“風”。

「止めておいてくれると助かるんだけど」

遠慮がちに、それは聞こえた。

「……何故？赤の他人の言葉など今のオレには響かんぞ？」

口先だけの薄っぺらい戯れ言なら尚更だ。

「だつてさ……、

この下って空き教室じゃん？僕、そこに住むつもりだからそういうホラー的な止めて欲しいんだよね」

「は？、住む？」

何を言ってるんだコイツは？それに理屈的にも自分本意過ぎるのだが。

「そんなことオレの感知するところじゃない。……化けてでるつもりもないしな」

どうなるかは神のみぞ知るところだが。
そう言い放つと、ヤツはちょっと意表を突かれた顔をして結局、笑いだした。

「ぶっ、あはは！嗚呼、そういうばそうだよねえ。化けてでるような未練なんかあったら自殺なんかしないか」

たぶん、何気なく言った言葉だろう。

「……………未練、か」

しかし、言われて頭に響く二文字。

“未練”がないから死ぬのか？

いや、

「違うな。オレは生きる意味が見つからないから、生きてても世界に何も影響がないとわかってしまったから“消えたい”んだ」

……言ってから、少し後悔する。こんな会ったばかりヤツに“消える”理由なんて話しても無駄だ。

オレは最後の一步を踏み出そうと、再びグラウンドの方に体を向けようとした。

「ふうん。キミ、バカだね」

ピシリ、と動きを止める。

……………あ？

今、コイツは何て言った？

「何だと…………？」

「だーから、自分から死を選ぶなんて、しかも借金苦とかならともかく、その理由でっていうのがね。ぷっ……………あはははー！」

言い放って、ヤツは笑い出した。

それは酷く癩にさわる笑い方で、

プライドの高いオレはそれに我慢できなくて、

もう一回、振り返っていた

*

「……………バカって言うな」

脅すように睨み付けて初めてわかったのは、そこに立っていたヤツが、ただの制服じゃなく真っ黒な白衣を着ていたことと、左右非対称な笑みを浮かべていることだった。

「もしかしてバカって言われ慣れてないクチ？
……嗚呼、成る程。“生きている理由が見つからない”なんて、ちよっと頭の良いバカに多い思春期特有の考えだ」

「……………」

自己の存在意義が確立出来ない、見つけれないってとこでしょ？
と、ヤツは言う。

オレは無言で眼力を強くする。
というのも、

……言い当てられたからだ。オレの内面が。
俺が内面に抱え込んでいた真剣な考えを“バカ”の一言で切り捨てられたからだ。

「何の……権利があつてオレをバカと言う？」

あああああ、違う。

今すべきなのはコイツなど無視してさっさと“消える”ことだ。
なのにどンドンヤツに意識が向くのがわかる。

駄目だ駄目だ。違うのに……！

「権利？……まあ、一応ないこともないかも」

「……………何だと？」

「理事長だしね、僕。この学園のさ。親御さんから生徒を委託された立場からすれば、バカなまねしようとした子供にバカガキって言うくらしいの権利はあるんじゃない？」

「っ！馬鹿にしてるのか？そんな話が……」

「別にキミに信じて貰おうが貰うまいが関係ない」

……ん？

オレはようやく気づいた。ヤツの纏う雰囲気カキが豹変した事に。

何だコイツ？

これは恐怖？怖い、のか？俺は？

「……………」

無言でヤツの顔を見つめる。

それでも彼は飄々とこちらを見つめ返して来た。

その時、

オレは気づかなかった。

彼がゆっくりと、こちらに近づいてきていたことに。

「キミさ、自分に一体どのくらいのお金がかかってるかわかる？」

「……何？」

「教育費だけで1人単価500万くらいはかかってるんだよキミに」

「……だから？」

「キミさ、お金を棄てるドブになろうとしてるんだよ？ だったらバカって言われても文句はないんじゃない？」

「ドブ……、だと？」

こんな暴言、初めてだ。

会ったばかりの人間にバカだドブだと言われるなんて……。

気づくと、ヤツはフェンス越しの向かいのすぐそこまで迫ってきていた。

それを呆然と見つめるオレは、初めてその前髪の下に隠れた顔に気づいた。

息を飲む。

……そこに立っていたのは、女と見まごうばかりの美少女、もとい少年だった。

「……どうかした？」

「い……や、…何でもない」

腰までしかないフェンスのそば。手を伸ばせば届きそうな位置に彼はいて……。

その顔にオレは少し見とれてしまって……。

その瞬間、オレは完全に油断した。

サツと伸びてきた手はオレの腕を掴み、

気づいた時には、

オレは屋上の床に転がっていた。

「ふう。取り敢えずミッションコンプリートかな？」

彼は、パンパンと服の埃を払いながらそう言った。

オレは、しばらく呆然と仰向けに空を見あげていたが、急に自分が

恥ずかしくなつて赤面した。

「何で……?」

「それって、何で生きていても世界に何一つとして影響もない人間をどうして助けたのか、って意味の“何で”?」

「……………」

「ふふ。それは僕が魔王になりたいからですよ?」

「……前後の文脈に繋がりを見つけられないのだが」

「そしてキミは生徒会長になればいい。表に“女王”、裏に魔王がいればこの学園も安泰だ」

こちらの言うことを全く無視して一方的にまくし立ててくる。

それに何だ?女王って?

「オレは……………」

「ん?生徒会長は良いよ!。…まあ、これから良くするんだけど。色々な特権優遇の諸々は勿論、寮も個室ぐらいはつけてあげようか?」

ニコリ、彼は愉しげに笑う。ああだから駄目だ。そんな笑顔を俺に
向けないでくれ……。

「オレは……もう駄目なんだ。
もう、何の為に努力していいのかわからなくて……」

気づくと、

自然と言葉が口をついてでてきていた。

それは、オレが中学生くらいから感じていた不安だった。

「オレは……人間とはどれだけ矮小なものかと戦慄したんだ。
それぞれに何かしらのドラマがあり、ドラスティックであるはずな
のにそれが表に出ることもない」

生涯を生き抜いた人間の人生に1つも、何か他人とは違うことが無
いということはあり得ない。

で、あつたとしてもそれは世間一般の凡庸と流行に埋もれていく。

「いずれ忘れ去られる程度の人生なのに、わざわざ生きていく必要
があるのか？」

……そんな命題に頭を支配されてそのうち、『もういいや』って気
持ちになって……」

オレは諦めようとした。でも助けられた。

……だったら聴かせてくれ。

「お前の生きる理由は何だ？」

淡々と、胸のうちに溜め込んできた膿を吐き出した気分だった。

オレは答えに期待してなかった。

急に『生きる理由』なんて真剣に聞かれても、すぐ答えられるヤツなんてそうそう……

「マンガ、かな？」

「は？」

思わず聞き返す。
なん、だと？

「それにアニメにゲームに書籍やらなにやらe t cも好きだもの。
続きをチエックする前に死ねるかって話だよ」

平たく言えば、娯“楽”が僕の生きる理由だよ」

頭が痛くなりそうだった。

「……馬鹿にするな。そんな低俗な理由……」

生きる理由がそんなものなんて馬鹿馬鹿しい。と、俺は言おうと思
った。

が、

「低俗な理由すら無いのはどこの誰でしたっけ？」

「……っ！」

オレは目を反らし、伏せる。

それを見た彼は、大きな嘆息をひとつして、

「成人して仕事に就けば、そのまま仕事が生きて甲斐になったり、家
族るものが出来てそれを生きる理由にすることも出来るけどねえ……。この年代の子供は勉強とか部活とか、賢さかしい子供にとって満足のい
くものはないに等しいだろうし」

難しいよね、と

どこか遠くに話しかけるような声でそう言っ。

「だから、そんな世の中に僕が提唱するのはこれさ！

その名も“快樂至上主義”！

なんかえっちいビデオっぽい名前だけどさ、『楽しいこと』を生きる理由にしてるっていうと、何かカツコよくない？」

「……オレが知るか」

はっ、力が抜ける。

脱力して、ひとつ短い嘆息を落とす。

寝そべって空を見たら何だか綺麗で無性に泣けてきた、とかそういうことはない。

それだけで急に生きたくなくなったりはしない。

ただ、

死ぬのは“もったいない”という気持ちで唐突に、

胸に、せりあがってきた。

生きる理由じゃなく、

死なない理由、か。

新しい『命題』だ。

それだけあれば確かに“死なくても済む”かもしれない。

「あれ、反応が薄い……」。

なら“悦楽至上主義”とか“快樂第一の法則”とか、バージョンは色々あるけど？」

「……そんなに主義を安売りするなよ」

*

「……さっき言ってたことだが」

「ん？何？」

「生徒会長に…なればいいのか？オレは？」

そう聞くと、ヤツは少し呆気にとられた顔をして

「……本気マジですか？」

「ああ」

「え、いいの？ホントに！？本当にOKなんすか、桜野サクラノ 零シズクさん？」

「あ、ああ……。それよりオレは名前を名乗った覚えが……」

「うっしゅあっ！…これでこの学園もさらにさらにさらに面白くなる
！！」

あはははっ！あーっはっはっは！と悪役トールのように高笑いする彼を横
目に見ながら、

何がそんなに嬉しいのかオレにはサッパリだったが、その喜びよう
に思わず笑ってしまった。

その月の6月。

生徒会選挙で他候補のガリ勉眼鏡を圧倒的得票数で突き放し

“オレ”、サクラノ桜野 シズク雫は1年生ながら生徒会長となったのだった

*

「ふふ、くふふふふふふ」

どこかの骸さんみたいな笑いを漏らしながら、さっきの“彼”は屋上のフェンスにもたれ掛かる。

特に代わり映えのしない景色を見ながら、何やら考え事をしているようだ。

「楽しい。実に楽しい展開になった!」

はた目から見ると相当危ない人だが、それをわかっているながらも押さえられない喜びのようなものを発散しているようにも見える。

「来年にはあの“部屋”も完成するし……。あの部屋の名前はどのようなかな」

ああでもないこうでもない、と呟く彼は最高に楽しそうに見える。

この1ヶ月前には、彼も退屈と平凡に絶望していた。

その渴望の果てにあったのは、

享樂のために全力を注ぐ生き方。

愉^{たの}しいこと、無いなら創ればいいじゃない。

『魔王の、誕生。』

女王の、誕生。(後書き)

一年生の春ごろのお話になってます。

女王と魔王。対比してんのか……？と、いうと別にそうでも無かったり。

“桜野雫”という名前は、察しがつく方もおられると思いますが、『生徒会長』キャラ二人から名字と名前を頂いております。

あと、前作でぶちまけられるお弁当を作ってくれたのは“彼女”です。

……微妙なつながりは結構前から考えてたり、そうでもなかったり。

のらりくらりと書いてます。

騒がし乙女の憂愁

*

「新聞部を……………ボクは、再建したいのですっ!!」

理科室に、久々に威勢の良い声が響く。

……………皆さまお久しぶり。

綾波^{アヤナミ}流星^{ナガル}、16才。ガナムに乗った時のアムロよりも年上なこ

とにちよっぴり感動するこの頃な学園生兼理事長です。

さて、先日の事件を解決したと思ったらまたこれだ。

嗚呼、魔王って人気なのかなあ？

まだ昼休みなのにすぐ来るとは。

さっきの大声の主はソファの前、僕の前に深々と頭を下げていた。

「ん、まあ……ちょっと落ち着こうか」

少し彼女は興奮ぎみに見える。

というか、鼻息が荒い。フシューフシュー、と今にも走り出しそうな列車のようだ。

「ボクは冷静ですっ！！！！」

「語尾にエクスクラメーションマークが3つもついてる人は冷静とは言わないよ」

「コーヒーでも飲む？」と聞くと、い、いただきますとの答え。

僕はコーヒーメーカーのスイッチをいれると、傍にあった自分の力ツプを一口すすり、“彼女”に向き合う。

その視線は目測よりだいぶ下で固定された。

……はつきり言って小さい。

140はあるのだろうか？、そんな生物が目の前で跳ねていた。

「あ、あのっ！」

「ん？なに？」

ふーむ、何処からどう見てもちっちゃいな……。
こなたとかゆたか、クドリヤフカに大河、ナギに種島さんクラスか
も。

それでいてボクっ子か……。

「未恐ろしいな……」

「？、何がです？」

「ん、いやこつちの話」

合法口……、嗚呼ダメだ。アグネスホイホイに引っ掛かる訳には……。

僕はわふたーはもう完全にアウトだと思えます。
……スゴく買いたいけど。

「そうは思わない？^{トウドウ}藤堂 ^{ミハル}三春ちゃん」

「ふえ、何がですか？」

ここで普通の返答が返ってきた！

「嗚呼、驚くところすらスルーするとは……」

これが天然の威力なのか……？ 凄い、凄いよ……ス ッガーさん……

「????、魔王さんは何だか不思議な人です？」

黄昏れモードになった僕の様子を見てミハルちゃんは至極、不思議そうな顔をした。

*

「それで、新聞部を再興するにしてもキミは何がしたいの？」

まずはそれを知らなきゃ始まらないよね。

黄昏れモードから復活した僕がそれを聞くと、彼女はその小さな背をいっぱいに伸ばしてこう言い放った。

「新聞をつくります！」

……

……

……いやいや。それは分かってるっちゅーに。

「あ、あー……どんな感じの？」

具体例はなにかないの？

「ワシントンポストみたいな…」

「スケールでかつ!？」

「え……じゃあ、毎日とか産経ぐらい?」

「キミは何を目指してるのや……」

「……すると、正教とか創価とかですか?」

「それはアウト!偏りすぎでしょ右とか左に!」

冗談にしか聞こえないのだが、彼女の目が本気なのが困りものだ。僕のそんな様子に気づいたのか、彼女は肩を少しすくめ、

「……七不思議です」

ポツリと言った。……謎のワードを。

「七不思議?」

「そしてあの生徒会長をギャフンと言わせるのです!」

「……話が繋がらないね」

どゆこと？

「その、ですね。話せば長くなるんですが……」

そうして彼女の本当に長い話が始まった。

*

「私が新聞部に入ったのはこの学園に入学してすぐでした。一年生はボクだけだったんですが、その時は三年生もいて、人数も少ないながら細々とやっていたんです」

ああ、そういえば去年壁に張ってあったの見たな……。

たしか……『生徒は見た校内での未確認生物の怪々吸血鬼編』

嗚呼、“アレ”か……。

「でも6月になって三年生は引退しちゃって、他の一年生を勧誘しようとしたんですが……」

そのまま彼女は顔を伏せる。

うーん……ちよつと想像してみる。この小さい生物が部員勧誘……。

この子が部長で、部活を率いていくって言われても確かにちよつとアレだよな……。

「それでもボク1人で何とかしようと、頑張ってたんですっ！ちやんとした新聞を見てくれれば今からでも入ってくれる人もいるかなって…。」

でも、そこにアイツが現れた！」

「アイツ？」

「あの冷血無慈悲の最低最悪冷血生徒会長です！」

「冷血二回言ったね…。」

まあ…、わかるけど。

美人さんで有能で仕事も出来るんだけどね。

ちよっと感情に乏しいというか冷たい印象を持たれちゃう事が多いから。

「何があつたの？」

「よくぞ聞いてくれました！ボクとあの冷血鉄血熱血女の因縁は深いんです！」

「熱血は多分違うよね…。」

これは…：…もの凄い逸材と僕は話しているのだろうか。
歩く萌え要素…：…？

「それはある日、ボクがいつも通り特集記事の見出しを作っていたところでした」

「あ…、ふむふむ」

ああ、危ない危ない。ちょっと聞き逃すところだった。

「急に部室のドアが開いてあの女が入ってきたんです！そして突然、『この部室と、残っている部費全額を生徒会に返還して貰う』って

「……それは予告なく？」

「はいなのです。突然、本当に突然のことです…」

抵抗する間もなく、だったということだ。

……まあ、最初からそれが目的だったんだろうとは思っけど。

「それでボクは部室を追い出されて、新聞部も事実上休部状態…。さらに次の職員会議で不要の認定を受けたら部自体も完全に廃部にされてしまいます…」

彼女はそう言っつてうつむく。

その瞳に光るものが溜まってるのはここからでも分かった。

……さて、背景は理解した。

それじゃあ現実、何がしたいのかをお聞かせ願おうか。

「その事と、七不思議は一体何の関係があるの？」

それが不思議、なのだけど。

「それですっ！ “それ”こそがボクの酒池肉林の策なんです！」

彼女はそう叫んで急に明るい顔を取り戻した。

……かなり表情の豊かな子だな、と他人事に思う。まあ、それはそれでとても面白いのだけど。

言ってることはもうワケわかんないけどね。多分、起死回生とか言いたかったのかな？

「そう、七不思議なのです！その噂の真偽を新聞部がカレーにスパ抜いて、生徒達の任侠を得るんですっ！
どうですかコレ、名案じゃないですか？」

考えつくのに一週間かかりましたけど、とも言いなさる。

それにしても、

カレー 華麗

任侠 人気

……どれだけ萌え成分を含んでいるのんだろうか、この子。
というか“萌え”を通り越して“蕩れ（とれ）”までいくかもしれ
ない。

嗚呼、ヶ原^{がはら}さん蕩れ^と。

「ふーん、面白そうっちゃ面白そうかも」

ん、水無月さんのあれより面白いかどうかだな。

まあ、前みたいに肉弾戦があると僕もヒヤヒヤするからコレくらいが“暇潰し”にはちょうどいいかもしれぬ。

そんな風に考えながら、僕はこの依頼を甘く、禁 目録16巻25
3ページあたりの美琴さん、もしくは消失の長門さんくらい甘く考
えていた。

「ふーむ、ふむ、ふーむ。まあ、概要は分かったさ。じゃあ、七不
思議を探す手伝いを僕にして欲しいってことでいいの？」

そういう流れだね、コレ。

「はいですっ！あ、でもあと探すのは六個だけですけど」

「え？何で？」

「だって、あのうちの1つは…ボクの目の前にいますし。 理科室に
いる魔王さん、でいいんですよね？」

「あ、あー…そうか」

そういえば、そういう噂があったか。…若干邪魔だったから消した
気ではいたのに、まだ完全じゃなかったか…。

「……ねえ、そこは最後にしといてくれる？」

「はい？何ですか？」

「それは魔王ほくの都合上、つてことで。そのかわり、戦力に成りそうな人を紹介するから」

「はあ。それはどなたなのですか？」

その質問に僕は少し微笑んで、

「会ってからのお楽しみだよ」

と悪戯いたづらっぽく言う。

*

「そんな感じで水無月さんの協力が決定しました！」

「……はあ……」

不機嫌オーラを隠しもしない水無月さんは、理科室の扉の前で頭を痛そうに押さえて立っている。

「まあ、それも仕方ないか。今日はこれから九十九さんと図書館に行く予定だったのに僕からの呼びだしコールが入ったんだもんね」

「知ってたんだっいたら呼ばないでよ！それに何なのさっきのは！？放送で呼び出しするなんてどんな神経してんのよ！」

「ああ、あれ？あの方法が一番確実だと思ったんだけど」

何がお気に召さないのさ？

「それはアンタが普通に名前を呼ぶならまだ良かったのに、あんな……恥ずかしいことを言うからでしょ！」

ガクガクと僕を掴んで揺さぶってくる水無月さん。

ちなみに何を言ったかは秘密。ああでも、福山ボイスの真似は上手くいったなあ。ルルー ヌ的……あの囁く感じ、だよねっ！

それにしても……ちよ、ちよ、力強すぎるよ？

首が、首が、飛ぶ！ボロ雑巾のように……！！？

「あつ、うわー、本当に水無月先輩ですっ！」

その時、まきパラッせいでチが降臨した。

「え、あ、だ、誰？」

何だか水無月さんは凄くテンパってる。その隙に僕は水無月さんの

ホールドから脱した。

ヤバい、本気で中のモノがシェイクされるところだった……。

「ふう……。この子はさつき説明した後輩の子だよ。名前は……」

「トウドウ藤堂 ミハル三春ですっ！初めまして先輩！あの学園二大美人に会えるなんて公園ですっ！」

「光荣だと思っよミハルちゃん」

「へっ！？にやあ、またやってしまいました。顔から地獄の業火がでるほど恥ずかしいです……」

「そんな、顔面を焼き尽くすほど恥ずかしがらなくてもいいと思っよ」

そうマメにツッコミをいれていると、くいつ、くいつ、と水無月さんが僕の袖を引っ張ってきた。
そして囁き声。

（……天然？）

（多分。まあ、害はないし面白いからいいんじゃない？）

（ふうん……。まあ、アンタが楽しいんだったらいいけど）

ん？水無月さんは何に拗ねてるんだろう？謎だけど……。

まあいいかスルーで。

「それにしてもお二人はどういう関係なのです？新聞部としてスゴく気になるのですが」

「えっ、えっ、あ、その……」

顔を真っ赤にする水無月さん。ふむ、何だろねその乙女な反応。

「ある時はクラスメイト。またある時は依頼人クライアントと魔王。そして今は……貸し一つ、ぐらい？」

「貸し、ですか？」

あの事件を知られるのは色々面倒だから濁して言ってみた。

まあ、あながち間違いではないよね？、という意味を込めた笑顔の水無月さんに向けると、今度はそっぽをむかれた。

……だから何に拗ねてるんですか？
ん、まあいいや。話が進まない。

「それじゃあ七不思議、ちゃっっちゃつと探しにいこうか」
「あ、だから関係を詳しく……!!」
「……ふん」

パパラッチもスルー、不機嫌もスルーして、僕は足早に歩き出す。

ここに七不思議探求デコボコパーティーが始動した。

＊＊

「それで、差し押さえた部費の総額はいくらになった？」

夕映えの部屋の中央、

そこに据えられた椅子に収まる少女は、感情を全く感じさせない声
音で目の前に立つ少年に問いかける。

「約50万円強。およそ全体の0.5割ほどです」

「駄目だな。せめて1割。100万は切り詰めなければ」

容赦ない言葉。

だが、それに対して少年は特に表情も変えない。少年にとってコレ
はもう慣れたことだった。

（決して冷たい人ではないんだけどなあ…）

少年の、胸の中の呟きを聞く人はいない。

「しかし、いいんですか？このままでは生徒会に対して非難が集中してしまいます。」

「せめて目的だけでも話せば……」

「そうしたら教師どもにみすみす予算を削る余地を教えるようなものぞ。……せめて来月までは隠し通さなければ」

「……はい」

生徒会長の前には一枚の書類があった。

そこには『生徒』と『教師』達の間で、全面戦争を起こすだけの“決定事項”が書かれていた。

「絶対に……我々が負ける訳にはいかない」

ポツリと、誰に言うのでもなく自分に言い聞かせるように、

彼女は静かに決意する。

孤高の闘いは始まっていた。

騒がし乙女の憂愁（後書き）

タイトルは某鍵ゲーのBGMより頂きました。

新キャラについて。

ボクっ子は嫌いじゃないです。現実には見たことがないのでわかりませんが。

名前はあれです。そういうところに住んでいます、ってことです。

福島サイコー！

続きはまた明日更新できるかと思います。

ぜひ、読んで頂ければ喜びの極みです。どうぞよしなに？（

七不思議ラブソング

*

つまらない。

今日は呼ばれてからずっと。

……どうした水無月茜？

彼と一緒になんだぞ！

もっとこう、にこやかにするとか何でも出来るだろうに！

自問自答しても原因は不明だ。

胸のどこかがキュッとなっている感覚。

何だ、この気持ちは

最初に私たちが向かったのは音楽室だった。

曰く、

「第一の謎です！その名も『闇夜に動く瞳』肖像画の怪』」

……。

無駄に名前が凝ってるのはあの小さな子の趣味らしい。
まあ、何でもいいけど。

それよりそれを聞いたときのナガルの様子の方が謎だった。

「え………で気本？」

「あれ、アレ、ソレ？」

……。

挙動が不審すぎる。

彼は何を知っているのだろうか？

「ここなのですっ！」

小さな子、……ミハルちゃんは目一杯背伸びをして七不思議だとい
う肖像画を指さしている。
が、届く気配はない。

うん、確かにこれは可愛いかもしれない。足がプルプルしてるし。

ナガルも何だか癒されるような顔をしている。

.....。

む、また何かムカツとした。
何で？

「思ったんだけど、こうやって調べるだけならわざわざ私達が手伝わなくても大丈夫なような……」

というかいらなくない？私。

聞くと、ミハルちゃんは凄い勢いで首を振って、

「そんなこと無いです！その……魔王さんに依頼したのは“こづい
う時”のためで」

「こづいいう時？」

「その、だからコレです。ボクじゃ背が届かないのです」

著名な作曲家の肖像画。何処の学校にも有るであろうそれは、なか
なかの高さに貼られていた。

「あ……、成る程」

納得だ。

「前にも一度一人で来たんですが下に椅子とか置いてても全然届かなくて……」

不憫すぎる……。

「あの、それで代わりに調べていただければっ！」

「分かったわ。じゃあナガル椅子でも……っアレ？」

いない。いつの間に？

「何処行ったんだろう？」

まさか私一人に全部押し付ける気じゃないよね？

『飽きた〜』とか言っつてそのまま消える可能性は十分あり得る……。

「その場合、ただじゃ済まさないけど……よいしょっ」と

ピアノの椅子があつたからそれを持ってきて、壁際に置く。

上に乗ると結構不安定で怖い。それでもなんとか肖像画を覗きこんだ。

……。

至って普通だ。特に何の変哲もないベーターメンの……。

ピタ。

ん？何で、絵と、目が、合っの？

その時、
肖像画の瞳がギョロリと動いた！

「ひっ！」

まさか本当に……！？

(…………ん。…………ん？)

囁き声まで聞こえるって…？げ、幻聴？これ本気でヤバ…！？

(……月さん？…無月さん？水無月茜さん？)

あれ？この声…？

(もしかしてナガル？)

(当たり前。今、目の前にいるよ)

(え？じゃあ、この目は……)

(うん、僕)

(な、なんだあ…)

本気で怖かった…。私だってお化けとかいっばしに怖いんだけど。

(で、何で“そんなトコ”にいるわけ？というかそこに部屋でもあるの？)

(あー…うん。僕の秘密のお部屋があったりするねえ)

はー……。

理科室だけじゃなかったのか…。全く何を作ってるんだか。

(ん？じゃあ、この七不思議の噂は…)

(あー多分この覗き穴だろうね。出るときに誰もいないか確認するために作ったんだけど、まさか見られてるとは思わなかったよ)

(……アンタねえ……)

一発、無性にコイツを殴りたくなってきた。

……そんな風に私がワナワナしていると、

(それにしても壁なかったら凄く接近度合いだね、コレ)
(へ?)

言われて少し考えてみる。

すると、この位置にナガルの目があるということは、顔は……。

「つつつつ!!!!」

ドッキリしすぎて椅子から落ちそうになった。

「だ、大丈夫ですか先輩っ!」

「う、うん……」

ヤバイ。想像が、いろんな大変な想像が…っ!

「ん?水無月さん……。何してるの?」

「あ、綾波先輩。何処いつてたんですか!?急に居なくなるから心配しましたよ?」

「にゃ、ナガル…っ!早い…」

いつの間にかもうナガルがそこにいた。え？え？、一体この部屋どんな構造になってるの？

「何が早いです？」

「い、いや何でもない」

この真相をこの子に話して良いものなのか、私には判断がつかなかった。

七不思議のこと、凄く期待してたみたいだし。

それに何より、うっかり動揺して落ちそうになったなんて言えないし！！

「あ、そうです先輩っ！どうでした？」

と、早速聞かれた！

「あ、あー……、私には特には解らなかったなあ……みたいなの？」

「……そうですか」

うう。目に見えてしゅーんとされると良心が痛む。けど……。

“あの”真相を知るよりかは……。

チラッとナガルを見る。

「まー、まー、ミハルちゃん。今はほら、真夜中じゃないからわか

らないのかもしれないよ」

お、ナイスフォロー！。ナガル！内心ちよつと喝采。

「むー、そうですね。……それでは深夜にまた来て調べるです」

喝采撤回。はあ？何なのその大変な展開は！？

「ミハ……」

「七不思議、というからには7つ全部をちゃんと暴かなければ記事としてのバリユールが下がってしまいますっ！」

「あの……」

「これが駄目なら……本当に廃部にされてしまうです……」

「……」

「その、だからっ！」

「大丈夫だよミハルちゃん。ね、水無月さん？」

そこでナガルの声。ああ、またあの優しい声だ。

「……うん」

頷くしかないだろう。この状況、この子。健気すぎて私も泣きそう
だ。

私達の首肯にミハルちゃんはその顔をくしゃくしゃにして笑う。

「あ、ありがとうございますです先輩方！！」

ちよっぴりの涙がまた彼女の笑顔を引き立てて。

*

（ん、まあ、それはいいとして夜はどうするの？あのカラクリを明かさないと解決しないんじゃないか……）

それをナガルに問うと、

（んー、ああ。あれはもう別な原因^{ダイ}を用意して細工済みだから大丈夫）

とのこと。まったく、用意がいいものだ。

そのナガルは暇だったのか、置いてあったピアノを弾いている。アイツ、ピアノまで弾けたのか…それに結構上手い？

「あー、そうだ。次の七不思議は何なの？」

ピアノに少し聞き惚れながら、ミハルちゃんに話しかける。

「二番目は化学実験室なのですが六番目の不思議にもう一つ音楽室のものがあるので、そっちをついでに」

「へえ。どういつやつなの？」

「それがですね……。これは見回りの教師が聞いたらしいのですが

『深夜に響く旋律〜謳うピアノの怪〜』とあって……」

そこまで聞いて急にダンッ、とピアノの音が外れた。そっちを見てみるとナガルが固まっている。

……………。

(ナガル？アンタまさか…)

(にはははは。夜さ、暇で1人だと無性にピアノが弾きたくなる時ってない？)

(ないわっ！あつたとしても学校で弾くな！)

信じられない。七不思議のうちの2つもコイツが原因なんて……。

ん？

ナガル自身も“魔王”なんて言われて七不思議の一部だから、結局3つもコイツが不思議原因？

(アンタってヤツは……)

(あ、そこはさ、『アンタって人はーっ！』って言うてくれると嬉し……)

(あ、あ？)

(ごめんなさい)

はあ、まったく。どうするんだコレも。ミハルちゃんに何て説明すれば……

「ミハルちゃん。僕が弾いたところ特に問題は見当たらないから、夜にまた調べてみようよ」

またその手かつ！

「え？そうですか。じゃあ別の七不思議の方に行きましょうか…」

一体夜は何て言って誤魔化す気なんだろう……。

すごい不安を抱えながら、七不思議探求は続く。

*

「な、予算を削るなんて聞いてないぞ！」

嗚呼、五月蠅いな。そりゃそうだ。“さっき”決まったのだから。

「生徒会の決定です。素直に従ってください」

いつの間にか冷たい声をだすのに慣れてしまっていた。

……会長の影響なのだろうか。

「そんな……。くそっ、生徒会室に抗議に行く。駄目なら職員室だ
！」

まあ、それが普通の反応なのだろうね。しかし“それ”をされるのが一番困るんだ。

「……………キミ、去年、予算から私用のラケットを購入しませんでした？」

薄く、耳元で囁く。これも会長直伝のやり方だ。こつやって“煽る”のだ、と。

「っ！何でそれを！？」

驚き方が分かりやすい。ま、体育会系は皆こつなのかな？

「さて、職員室に行くんですけどっけ？」

「……………」

「まったく、横領とはお粗末ですね。やるならバレないようにやらないと」

「……………」

「教師達にバレたら停学モノですよ。お金関係はシビアですから」

「……………わかった。削減に賛成しよう。だから……………」

「だから何ですか？あなたは“自主的に生徒会の呼び掛けに応じて予算の削減に賛成した”、でしょう？」

「……………ああ」

我ながら悪役が板についてきた、と思うのだけど。会長は“まだ甘い”と認めてはくれない。

会長には目指す人がいるらしい。

というかライバル？

パートナー？

心の支え？

いずれにしても“自分”が去年、副会長として彼女の下についてから一度もお目にかかったことのない人ではある。

……会ってみたい、という気持ちもある。だがそれ以上に何だか怖かった。

“彼”がいれば自分は“彼女”にとって不要になるのではないかと。

ああ、言っていないかった。

自分は彼女が、あの冷血鉄面皮の生徒会長のことが好きだ。

ずっと、恋煩い。

……言ってて自分で悲しくなるけど。

今日も彼女の指示を聞く。

彼女の“勝利”の為に。

今日も、自分は……。

) E n d o f O n e - s i d e
(

七不思議ラプソディ（後書き）

タイトルはハルヒからです。

……笹の葉な感じですよ。

明日も更新します・・・

俗・七不思議ラプソディ

*

「蠟人形にしてやろうかあっ？」

「にやっ！？な、なに突然……。急にどうして脈絡のないことを叫ぶの？」

「いや、何となく無性に叫びたくなる時ってない？」

「……ないでしょ。特にそのセリフは」

「そう？だってちょっとストレスがね……。僕が主人公だということを忘れそうなほど僕視点がないんだもん」

「はあ？」

「いや、こつちの話だから気にしたら負けだよ」

「????？」

*

今、僕達は化学実験室にいる。

七不思議の第二があるらしいのだけれど……。

……。

まあ、見てみないとわからないよね。

「その七不思議とは『校内を徘徊する恐怖／＼人体模型の怪／＼』ですっ！スゴく怖そうですよね！一体どんなものなのでしょうっ？」

「……………」

水無月さんがこつちを見ている。スゴい勢いで見てくる。

（いやいや。何でもかんでも僕が原因ってことはないからね）

(……そうなの？いや今までのパターンの、ね。ちょっと怪しい気がしたから……。疑ってゴメン)

おお、なんだこのいい人。さっぱり系はポイント高いよね。

クールビューティー？

ホークアイ中尉とか、古手川さんタイプっぽい。

(まあ、結局は僕が原因だけど)

(……………)

ガッ、と頭を殴られた。

(なにその無意味なフェイント。私の謝り損じゃない！)

(いやいや、ちょっとした言葉のトラップじゃん……。孔明さんの罠には届かないけどねっ！)

(何を威張ってんだアンタは!?)

あっはっは。

しかしまあ、ことごとく僕のお遊びの尾ひれだわ、七不思議。

(じゃあ、それって一体何をやって……)

「?、お二人はさっきからどんな秘密のおしゃべりをされてるのです?」

ボソボソ話が聞こえたのか、ミハルちゃんが訝しげにこちらを見ている。

んー、やっぱりバレる訳にはいかないよね。

「ん、ちょっと週末の予定とかをね、2人で確認しあってただけだよ」

「なつつっ!?!」

「なんとっ! やっぱりお二人はそういうご関係で……」
「なわけっ…!」

(水無月さーん貸し1、だよ?)

「くっ……」

うわー、水無月さん顔真っ赤だ。それに湯気、湯気がまた……!?

「ラブラブさんですか?」

さらに突っ込んでくるミハルちゃん。まあ、コレくらいで收拾つけどいた方がいいか。

「あはは、だといいんだけどね。普通に友達として、だよ？」

そう告げると、ミハルちゃんは目に見えて落胆して、

「そうですか……。もし本当なら号外をだしてもいいくらいのネタなんですけどね」

とも言っ。

……。そこまでされると流石にちょっと怖いけど。

「あ……。そうですっ！本題を忘れるところでした。人体模型は何処に？」

「え？あの棚の上にあるよね？」

「あ……。高くて見えませんでした」

しよぼーんとするミハルちゃん。

頭のとっぺんについているアホ毛らしきアンテナも、しなーっと垂れている。

……。何だこの可愛い生き物は。萌えの権化じゃないか。

「今なら小鳥遊^{たかなし}くんの気持ちかわかるかも……」

嗚呼、ミニコン万歳。

「何を言ってるのよ……」

(それより、“アレ”が動くってのはどういうカラクリなの?)

水無月さんはヒソヒソと、そんなことを聞いてきた。んー、そんなに知りたいですか?

(“アレ”は、ただのラジコンだよ。パソコンで操作するヤツ)

(ああ、ラジコンね……。ってラジコン!?アレが?)

(肯定。ラダドライバも装備済みであります!大佐殿!)

(……なにそれ?)

あ、通じなかった。やっぱり駄目か……。

ミノ スキークラフトとかユグドラ エルドライブもいいし、ジークリード・システムとかも格好いいよね。

どれか1つくらい男なら憧れるものさ。

(それよりラジコンって……)

(んー、アレは暇潰しに財団で造らせた実験機プロトタイプだよ。マネキンみたいな外見だったから改装してみた)

(趣味悪くない?)

(んー、そう?でもアレ、最初は“理科室”に置いてあったし。マネキンのままよりは周りに溶け込むと思わない?)

(あ……、成る程)

まあ、結局は化学実験室に持ってきたけどね。だって怖いんだもん。寝るときに傍にアレがあるとやっぱり無理なもの。

(え、じゃあアレって動くの?)

(うん。だからラジコンだって言ってるじゃん。あんまり歩行は上手くないっていうか、結構転んじゃうけどね)

そのまま這いつくばって動かせたりもするけど、そっちの方は倍怖いし。

人体模型が床を這ってたら、『きつと来る』貞子さんよりもシユールだ。

「アレって下におろせますかね?いろいろ調べたいのですが」

うーん、調べられるのはやっぱりまずいんだよね。

「あー、アレの噂も夜だよな。だから夜にもう一回来た時でいいんじゃない？」

「全部それで乗り切る気がい……」

「何か言った？水無月さん」

「いや、何も」

「それじゃ次に行こうか」

ジト目の水無月さんに釘をさして2人に先を促す。

……しかし、そろそろミハルちゃんへの言い訳がキツくなって来たなあ……。

次の不思議の原因も僕でないことを祈りながら、僕らは次の謎へ向かった。

*

お次はグラウンドだった。

見ると、野球部が真面目に練習している。

私立なだけあって我が校の野球部はなかなか強い。

今年は甲子園にも行けるんじゃないかと期待がかかる程のレベルである。

試合が近いらしく、練習に熱が入っているのはここからでもわかった。

しかしまあ、100マイルとか140キロ台のフォークが投げられたりストライクゾーンを九分割するピッチャーとか、通天閣打法とか内野安打で三塁までいけるバッターとかがないのがもつたいない。何かしら欲しいよね。

優勝なんて奇跡を起こすには人体の神秘を何かしら飛び越えなければいけないと僕は思う。

しかし、色々漫画が混ざったね。

「それで、グラウンドの七不思議って何なの？」

「それがですね……『分析される謎々野球データの怪々』です」

……。

何かネーミングが格好良い。

「それって一体どんな謎なの？あんまりホラーチックな感じはしないけど」

水無月さんは率直な疑問をミハルちゃんに尋ねる。

「そのですね……これは今年に入ってかららしいのですが、野球部のサイトにいつの間にか新しいページが増えていたらしいのです」

「うんうん」

「そのページは管理者にしかアクセス出来ないようになっていて、そのページに情報が書き込まれるらしいのです」

「うん。どんな情報？」

「それがですね……」

パウ　ロ化された部員のデータが続々とあがるらしいのですっ！

「……………」

水無月さんは黙っている。僕の方を見ようともしない。

「誰々はパワーAとか、コントロールF、広角打法とかノビ4とかモテモテとか書き込まれるらしいのです。しかも練習を続けていると数値があがったりして」

「……………」

「そんなことが出来る人なんて、ゲームが好きで、パ　プロから野

球にハマった逆流な人^{ホロロッカ}で、パソコンが得意で、妙なことに凝り性で、それだけの技術を持ったよっぼどの暇人なのでしよう。一体、誰なんでしょうか……」

うーん、と言いながらミハルちゃんはお悩みモードに入った。まあ、考えたって犯人にたどり着くことはないだろうけど。

それよりこの場で一番怖いのは…

(……ナーガールくん?)

にやははは、は、は……。

(そういうことなの?)

(そういうことです)

端的な質問に正直に答えたら、ギリ、ギリ、と黒衣の襟を引っ張られた。

(アンタって本当に暇人なの?)

(あはは。お飾りの理事長というのも暇なものなんだよ)

(……勉強はしてないの?)

(んー、ああ。僕、もう大学出てるし。アメリカの)

(……………はあ?)

(お。今日最長の『はあ?』だねえ。何かいいことでもあったのかい?)

(いや、じゃなくて……。その、え、ええー……………)

(何さ。僕がそんなに馬鹿っぽそうに見えるって?眼鏡キャラなのに)

(それは偏見でしょ。

……………じゃなくて、大学まで出てるのに結果がコレかよ、ってのが私の言いたいことよ)

(……………失礼な。僕、記憶力は相当なんだからね。エ、アの使徒は全部言えるし、MS・MAは名前から型番までファーストに始まり、OOまで全て網羅してるし。マニアックなところをいくとファナーのモデルとかも全部覚えてるもん)

あ、は除く。

僕アレは無理です。

(……………そういうところが残念なのよ。というか全部パチンコ?)

ガツクリしている水無月さん。んー、何が駄目なんだろうね?

「?、また秘密のお話ですか?」

ミハルちゃんの害意ない問いが前振りなく飛んできた。確かに急にこう聞かれるとテンパるのも無理ないか。僕もちょっとビックリした。

「ち、ちちちち違っつ！わた、わた私は……！！」

あれはテンパり過ぎだけど。

「んー、そうだね。結局映画にでも行こうかって方向でまとまってきた所だよ」

「映画ですかっ？いいですね、やっぱりロマンチックなラブストーリーの映画を？」

「ちよっ……！！勝手な話を……！！」

(貸し、ひ・と・つ)

「……くっ！」

また顔が真っ赤だ。ふふふ。やっぱり、水無月さんはいじりがいがあるね。

「……もういいから次に行こう。いや、行く。絶対もう行く……！！」

「あ、水無月先輩っ！？」

「大丈夫大丈夫。いつもの病気だから」

病名はそうだな……言うならば、突発性赤面後超速走行症候群？

嗚呼、やっぱり水無月さんは実に面白い。

そんな感じでグラウンドでの不思議発見を終了（断念？）し、次に僕らが来たのは……

*

「階段？」

そこは階段。それも教室とかがある棟の方の階段である。

放課後のこの棟は、みんな部活やら寮やらに戻ってしまっているの
で人の気配はしない。

西日が射し込む校内は、言うなれば“雰囲気”満点だが、今は騒が
しい人の声が学校特有の吹き抜けの階段に響いている。

「騒がしくて悪かったわね……」

あ、聞こえてしまった。失敬失敬。失言だったね。

「……本当にね」

元気がないね水無月さん。今の状態を言うなれば……ツンダラ？

「誰のせいで疲れたと思ってるのよ……」

えく？誰だろうねえ？

「……久々にイライラを通り越して殺意が湧いたわ」

物騒なことを言う水無月さんはほっといて、僕はミハルちゃんに話しかけた。

「で、階段にはどんな謎が？」

「それなんですけど、『階数の恐怖』放課後の階段の怪』と、言うらしいのですが」

「……………」

少し押し黙っていると、水無月さんがジト目でこっちをまた見えてきた。

（ナガル、アンタまた……）

呆れ顔のその問いに、僕は首を横に振って答える。

（いや。これに僕は身に覚えはないよ）

（……………え？）

ふふ、やっと面白くなって来たかもしれない。今までは全部拍子抜けだったから期待しちゃうかも。

「それって一体何が起きるの？」

それを聞かないと。

「そのですね、端的にいうと階段の数が減るらしいのです」

「減る？」

「はいです。えーと……、この階段は一階から三階まで50段あるらしいのですが、放課後に数えると49段になっている」と

「49……ああ、“しぐ”か」

ふむ、ありがちなだね。

「上から数えるときに、自分の乗った最初の一段を抜かすミスをして、単純に下から数えるときより一段少なくなった、とかじゃないの？」

それがコレの普通のオチだよな。

「……ではないらしいのです。どちらも下から数えたと言者は言ってます」

「ふむ……。そうなると本当に単純に一段増えた、と？」

「らしいのです」

へえ。それはまた、ようやく七不思議らしい謎なものだ。

「それ、測つたのは誰？」

「え……？それはわかんないです」

「でも教師ではないよね。午後8時以降に数えた訳でもない」

「8時？……はい。断言は出来ませんが恐らくは」

それを聞いてから、あごに手をあて少し考えこむ。

色々な可能性をシュミレーションしてみると、見えてくるのは……

思い付いた“それ”は不意の声に遮られた。

「君達……こんな時間に階段で何をやってるのかの？」

その声に振り返ると、そこには白髪のご老人が立っていた。いや、別に幽霊さんが降臨された訳ではない。

「あ、教頭先生！」

ミハルちゃんはすぐに誰だか分かったようだ。僕はちょっと気づくのに時間がかかったけど。

「ふむ、君は確か……藤堂くん、だったかの？」

そう言って目を細めるご老公もとい教頭、真田^{サナダ} 忠敬^{タダヨシ}は今年で60歳の還暦を迎えた古株の教師である。

確か、僕が理事長になる2、30年前からこの学校にいるらしい。おっとりしていながら、巧みに数学の教えるその能力^{スペック}は生徒にも人氣が高い。

「はいです！名前を覚えて頂いているなんて甲子園です！」

「急に高校球児の夢に飛んだね。……真田教頭、見回りご苦労様です」

「まあこれも教師の仕事だからのう……うん？君は……？」

嗚呼、あつちもようやく僕に気づいたようだ。僕は口元に指をあて、シイーというポーズをとる。

それを見て、真田教頭は一瞬固まったが、またすぐに普段の表情を

取り戻した。

ふうむ、やっぱり年季の入っている人は反応が落ち着いているね。

「真田教頭、僕たちは新聞部の取材をしていたんです」

わざとらしくない程度に自己申告してみる。まあ、そもそも新聞部ですらないんだけどね。

ここは嘘も方便？説明するのも面倒だし。

「新聞部？……あの部は確か無くなったはずではなかったかの？」

「ち、違います！休止しているだけで、人数が揃えばまた復活します！」

と、ミハルちゃん。よっぽど気にしてたんだろう、その顔は必死だった。

「うん、そうなのかい？それは知らなかった。すまなかったね」

「い、いえ……」

そのまま微妙な沈黙が生まれる。嗚呼何だか、なあなあになっちゃったなあ。

こういう空気好きじゃないんだよね僕。

「……ね、ここはもういいよ。次を調べようか」

「え？ナガル……？」

「あつ、まだ謎が……」

2人の手を掴んで、まだ未練のあるようなミハルちゃんと、僕の陰に隠れて何故か気配を消していた水無月さんを無理に引きずるように歩き出す。

そこでクルツと向き直って、

「では教頭先生。見回り頑張ってください」

「うんうん。君らも遅くなる前に寮に戻るよ」

「はい、そうしますー」

……なんて、夜中になったら校舎に忍び込む気なのにしゃあしやあを言ってみる。まだミハルちゃんはジタバタとしているが、僕は気にせずひきづる。

理由は？

……何となくあのままだと面倒事が起こりそうな気がしたからね。

あれだ。野生の勘？

そのまま僕達は階段を後にした。

あ、言いかけた謎の本当の理由は秘密ということ。それはまた別のお話。

次は七不思議の第五。

だけど第六は“ピアノ”だからもう解決？ 済みだし、第七は不本意ながら“僕”だから、どうにも実質次が最後らしい。

いままでばつちり解決出来たのが全く無いためか、水無月さんのテーションは低く、ミハルちゃんもさっきの“階段”を納得してないらしく眉間にシワがよっている。

最底辺の雰囲気に進むデコボコパーティー。

嗚呼、息苦しい。

ヒヤヒヤしながら向かった先は…

*

「ここです。七不思議の第五は。よりもよってここなのです」

その名を口に出すのも億劫そうなミハルちゃんが指差す先には、一つのプレートがかかっていた。

「あー……。マジですか？」

“生徒会室”

その四文字が、僕の目の前にはあった。

「タイミング悪すぎない？」

「いいえっ！コレを乗り越えなければ良い記事は書けません！」

とかなんとか言っても、ミハルちゃんは扉を前で上を見上げて固まっている。

言うなれば、はじめてのおつかいでお母さんに頼まれたものを忘れてしまつて呆然としている子供のようで。

「せめてメモは欲しいよね。メモは……」

「はい？何のメモです？」

「いやこつちの話だよ」

まあ、迷おうがオーバーランしようが僕には関係ないけど。

「じゃあ……開けます……！」

ミハルちゃんは気合いをいれて、……入れる必要がある生徒会室って何だよ、とも思いながら、扉に手をかける。

が、そのまま停止する。

「……ミハルちゃん？」

「ちょっと待ってくださいっ！あと少しで、あと少しで開きます

から〜！」

とか言いながらプルプル震えていっこうに開く気配がない。
ふむ……、まどろっこしい。

「あー、まどろっこしいっ！私が開けるわー！」

「あっ……」

以心伝心。水無月さんが開けに行ってくれた。内心喝采だよ、あの
勇気。

“ガラッ！”

と、勢いよく開け放たれた扉の先その室内には、驚いた顔をした少
年と、無表情な生徒会長が鎮座していた。

「何ですかあなた達は？」

「あ、あのボクたち……」

「ここは用のある人間以外が無闇に出入りすることは禁止されてい
ますよ？」

慇懃な、かつ高圧的な言葉。

それは生徒会長、桜野 雫の隣に立つ少年が放っていた。

「ちょ、ちょっと人の話を……」

「ノックも無しに突然扉を開ける無作法な方々と話す事はありません
ん」

「あー……」

「……これから大事な話があるんです。本当に火急の用事でなけれ

ばお引き取り願えますか？」

「……………」

水無月さんが無言でヘルプを送ってきているが、僕はそれに気づく余裕もないほど驚愕していた。

あ、今年でますね驚愕。

……………じゃなくて、

ふむ……………、こんな“生徒会役員らしい生徒”なんて居たっけ？
こんな絶滅危惧キャラ、僕が見逃していたなんて……………。

「我が一生の不覚……………！！！」

「は？」 「はい？」 「何です？」

啖きが聞こえたのか、3人が同時に振り返ってきた。それは“生徒会長”を除く3人。

あまりにも息がピッタリなので噴き出しそうになったのは秘密。

一方、生徒会長はというと、明らかに驚いた表情で固まっていた。それはもう硬直、という表現が真まことに正しいご様子で。

それにこそ不覚にも笑ってしまいそうだった。

「……………そんな顔も出来るんだね、栗ちゃん？」

「綾……波!？」

懺・七不思議ラプソディ

「綾……波……!?」

それは普段ではほとんど見れない彼女の驚いた姿で。

「貴様っ！何があつたんだあの理事会の決定は!？」

さらに完全に予想外の行動まで飛びだした。

体当たり、よりは突進に近い勢いで雫ちゃんが砲弾のように突っ込んで来たのだ！

「ぐふっ!?……イグナイテッド」

そのままザムザザーッと扉の外に押し出されるようにして転がる。

ぐああ、めがっさ痛いんですが！

そして何でマウントポジションをとるんですか雫ちゃん!？」

「貴様、一体何をやらかした？財団のヤツラの不興をかうような事をまたやったのか？」

「げふ、げふ……。あー、あー、落ち着いて……」

「落ち着いてられるか！突然の降格人事など……貴様に何かあったのかとオレは心配してっ……！」

雫ちゃん怖いです。口から本気で火を吹きそうな勢いだよ？

「や、や、ちょっと周りに目を向けてみなよ。3人が凄い顔してるから」

「は？………あ」

今気づいた、みたいな顔をして雫ちゃん機能停止。

クール・俺様キャラで押ししてたのにそれは……ねえ？張りぼての外
面がボロボロですよ？

啞然としているボクっ子とツンデレ娘と真面眼鏡くんの反応は一緒
だった。

「『』知り合い！？』『』」

シンクロリアクションな室内の3人。タイミングも息ピッタリです
ね。無駄に凄いよ。

「知り合い、というか、ねえ？んー、雫ちゃんの中では僕ってどう
いう立ち位置ホジション？」

「オレに聞くな」

そう言つてピイツとそつぽをむく雫ちゃん。明らかに取り繕つてしている感が満載だ。でももうほとんど無駄だよね。後の祭りって感じではないし。

「じゃあ僕主観から説明すると、……んー、あれかな、ある時は伊藤 静と命の恩人。ある時は女王と魔王。そして今は……貸しプラマイゼロだよ、確か」

「……ああ」

短くうなづく雫ちゃん。

うん、あのお弁当には助かった。用意して、と頼んだら急だったのに雫ちゃんは本当に翌朝作ってきてくれたのだ。

まあ、味はなかなか残念だったけど。しかも床にひっくり返されちゃったしね。嗚呼、あれは不憫だったなあ……。

「貸し？貸しってなんなのですか？凄く弱味っぽいので知りたいのですが！」

ミハルちゃんが妙なところに食いついてきた。

「弱味って、本人目の前にして言っても仕方ないから……。それに大したことでもないよ？」

そもそも貸しなのかすらわからないねアレは。

逆にある意味、邪魔した立場だから別の不良のお礼参りのな“貸し”は適用されるかもだけど。

そんなんされたら……ヒィッ！

「何だかやってもいないことで怖がられている気がするんだが」

「気にしたら負けだよ。負け具合でいったら働くのと同じくらい負けだから」

「どんな重症の自宅警備員だオレは……」

おお、久しぶりだけどこの会話リズムは健在だ。

うん懐かしい。去年は仕事の仕方とか雫ちゃんに教えてたりして結構一緒だったけど、最近は無沙汰だったからな！。

なんて、ほんわか思い出してたら水無月さんに何故か睨まれた。

……にやんで？

「……それで、一体何の用だ？ただお喋りに来たなどという訳でもないんだろ？」

気を取り直した、というより取り繕いが完了した雫ちゃんはいつも通りの調子だ。

嗚呼、その男言葉がいいっすね。俺様具合が滲み出てるよ。

「うん、今日は……調べさせて欲しい事があって」

「調べさせて欲しいこと？重要な用なのか？」

「んー、それは……」

重要……、なんだろうっねえ。

チラッとミハルちゃんを見ると、期待のこもったキラキラ視線を返された。

うわ、まぶしっ！

「まあ、平たく言えばこの部屋を調べさせて欲しいんだけど」

「…………生徒会室をか？」

そう言つと、何故か急に雫ちゃんの顔が変わつた。

あれ？何ゆえマジモード？

「この部屋の何を調べる？」

「え？えー、そのー……………」

「はつきりしろ。お前らしくもない」

「うーん…………まあ……………」

何だかこのノリで七不思議を調べたいです〜キラッ みたいなこと
言つたら大変なことになりそうなんだけど。
首を締めて『貴様はいつもいつも訳のわからんことばかり……………!!』
とか普通にありそうなので怖いのです、僕は。

そんな風にコメントにつまっていたら突然、

「何だ？アレの事なら早く言えばいいだろうが……………!!」

「会長！」

深刻そうなご様子の会長さんと副会長さん。は……？何をそんなマジトーンで話してらっしゃるの？

うーん……

取り敢えず僕がすべき反応は……

「アレ”って何？」

率直な疑問をぶつける事だよね。

「……それはシラを切っているのか、はたまた本当に知らない反応なのかはつきりしてほしいところだな」

「シラを切っているって答えたらどうなるの？」

一応聞いてみると、

「……死ぬ手前まで殴る」

「本当に知りませんっ！」

だから怖いです雫様。ブラックオーラが垂れ流しなんだもの。

“そんなところ”まで魔王に似せる必要は無いんだけどねえ……。

「知らないならいい。あと搜索は不許可だ。さっさと寮に帰れ」

デレの一片もない、ツンツンの態度で拒絶された。ここら辺が鉄面皮と呼ばれる雫ちゃんの真骨頂なのだろうけど。

「……そんな風に言われると余計に気になるね」

食い下がってみると、

「部外者に教えることはありません。会長が立ち去るように言っているんですから早く帰ってください」

カッチーン。

何だその言い草は？

と、思ったのは僕だけではなかったらしい。

「今のはムカツと来たのです！あんた何様ですかー？」

「生徒会副会長ですがなにか？」

そう言っつつつかかるミハルちゃんに対して副会長くん（仮）は冷たく受け流す。

バチバチと火花が散るようにミハルちゃんと副会長くん（仮）の視

線がぶつかり合うのを眺めながら、僕は色々と思考を巡らせていた。

“アレ”とは何なのか。

「ミハルちゃん、もういいよ。今日のところは帰ろう」

火花製造器の片方に撤収を持ちかけると、

「ナガル先輩！？このまま引いたら男がすたります！」

「君の中の男は逆にすたった方が良いと思うよ」

相も変わらず逸材だねこの子は。

「帰ってくれって“生徒会副会長サマ”が言うんだから、帰ってあげたらいいんじゃない？ねえ？副会長くん？」

「え……？あ、ああそうです。特に用事のない生徒は速やかに寮に帰ってください」

急に話をふると、杓子定規な返答が返ってきた。

……「こっちはこっちで絶滅危惧種な少年だけれども。」

「だってさ。じゃ、お邪魔したね隼ちゃん。」

「……………」

無視された。

精神的なこうげき！

綾波は58のダメージ！

綾波は逃げ出した！

「あつ、先輩!？」

「ナガルっ!？」

シユタタタつと理科室に戻る途上、後ろから「廊下を走っては行けません!」との副会長くんの声が聞こえたけど無視の方向で。

そんな感じで放課後の探索は終了です。

“放課後”は、だけど。

懺・七不思議ラブソング（後書き）

あああ、明日は合格発表DEATH。

誰かヘルプ！！って感じなのですが、小説は明日も更新予定。

ハイペースに行きますよー！

乙女座の日

*

なんだろうね。

私もう疲れたんだけど。

引っ張り回されるだけ回されて、挙げ句生徒会室に置き去りにされるし。

あ、それに何となく会長さんから「なんだこの女ナガルの何なんだ」みたいな視線を感じたようなの？

嫉妬する会長？

いやいやまさか、ね。

はあ……、そう。私だって色々と一人で考えたいことだってあるんだ。

私だって

*

「七不思議探索〜夜の部〜スタートだね」

「はいですっ！」

「……はあ」

ミハルちゃんはアレとして、ナガルは何でこんなにテンションが高いんだろ。そんなに面白いことなんてあったっけ？

「……何で私ここに居るんだろう」

「うわ、水無月さん墮テンション最下点だね」

「だって眠いし」

「まだ8時だよ？ハッ、まさか水無月さんは夜8時か9時には寝てしまう現代では小学生でもなかなかいない優良児！？」

「なわけないでしょ。疲れたからお風呂に入ってサッサと寝たいのよ……」

「あ、水無月先輩は入ってこなかったんですか？お風呂」

「え？うん。時間も無かったし」

これは嘘。ただお風呂上がりにナガルと逢うのが恥ずかしかっただけ。

「……ん？“逢う”？」

いや違う普通に“会う”だけだ。

「ボクはもう入ってきちゃいました。ちょっと汗かいちゃったのもありますけど」

「へえ。あー、なんかシャンプーの香りとかがするもんねえ」

「……ナガル先輩。セクハラですか？」

「……ほつ！何故……!？」

「冗談ですよ。魔王さんでもそんな風におどろくんですね」

あ、はは……一本取られたね、とか言いながらナガルはヘラヘラしている。

……何故かイラツとした。

ナガルの背中を結構強めに小突くと、凄く訳のわかってない顔をしていたけど無視だ無視。

私はサクサクと七不思議の現場である音楽室に、今日二度目の侵入を果たした。

*

「うーん、特に変わったところはないようですが」

ミハルちゃんはしばらく室内を調べた後、スゴく正直な意見を述べる。

(ま、そりゃ何も変わってないしね)

ナガルはついさっき「策は我が掌中に有り！」とかカッコつけて何処かに消えてしまった。多分、例の隠し部屋だとは思っけど……。

(どっ、するんだろっ?)

事情を知る側からすると妙にハラハラした。まあ、ナガルのことだからどうにかするとは思っただけだ。

呆れ半分、心配半分。

そんな感じで音楽室を見回していた時、

“パチンっ”

「え?」「何です!?!」

不意に、

室内の照明が全て落ちた。

暗闇。それも月明かりの漏れすらない完全な暗黒。

それが私達を急に襲った。

「な、なんですかっ！？いったい何が！？はわわっ！はわわわわっ
？」

ミハルちゃんが凄く可愛らしくパニックを起こしていた。

「わ、わかんないけど急に電気が落ちた……ね」

私もプチパニックを起こしそうだったけど、ミハルちゃんの慌てっぷりを見ていたら不思議と平静としていられた。

「ハッ、まさか七不思議の祟りがココに！？」

「いやちよつとミハルちゃん落ち着いて……」

「スクープチャンスですが怖すぎです！まさかオヤ 口様がお怒りに！？ボクは美味しくないですよっ！！」

「ナガルみたいな動揺しちゃ駄目だって！」

ああ無秩序……。

さらに、それに拍車をかけるように突然ピアノが鳴り出した！

それには流石に私も心臓を鷲掴みにされたような感覚を味わう。

暗闇に慣れた目に映ったのは、誰も触ってないピアノの鍵盤が沈む光景、すなわち目に見えない誰かが弾いているかの様に見える姿だ

った。

そうしてピアノはチャカチャカと謎の曲を弾き鳴らし続ける。

ミハルちゃんはどうしたんだろう？と、思って怯えながらもそちらを見ようと、案の定完全に動きの止まったミハルちゃんがいた。

「み、ミハルちゃん？」

「……………」

返事がない。

ただのしかばねのようだ。

あれ？まさか気絶してる？

……………どうしよう、今この場で頼れるのは自分だけになってしまった。ミハルちゃんはブラックアウトだし、ナガルはここにいないし……………ん？ナガル？

あれ、七不思議って全部ナガルが原因（二個は未確認だけど）だったんだよね？

じゃあこの騒ぎは……………

しばらく棒立ちでいると、暗闇に慣れた目から入ってくる光景に段々と疑問が湧いてきた。

ピアノは確かに怖いけど、アレに似たようなものを何処かで見たよ

うな……？

その時パチリ、と消えた時と同じように突然明かりがついた。

「どうしたの二人とも電気なんか消して……ハッ、ま、まさか禁断の百合！？リアルまりみて！？僕お邪魔虫？三人揃えておじゃますトリーム？」

そして急に現れて何のひねりもなく訳のわからないことをマシンガンのように放つのは……当然ながらナガルだった。

「あれは確かに強いけど……じゃない！！何言ってるんだ私は！？遊王は確かに子供の頃にやってたけど私はブツクマジシャンガールとか使う控え目な子だったわよ！……あー、また違う！！！」
「というかナガルあんた一体今まで何処にいたの！？」

「マシンガントークだね水無月さん」

「そうだけどアンタにだけは言われなくなかったわー！！！」

あー、腹が立つ！苛立ちが最高点かもしれない。今ならナガル（コイツ）を殺れるかも……なんて思った。

……でもやっぱりナガルが見つかって安心している自分もいた。それでやっぱり私も怖かったんだと今更自覚したんだけど。

「うん、水無月さんも女の子だから仕方ないよ」

「……っ……っ！人の心をよむなあ……っ！」

私の叫びは音楽室に傳くも霧散した

*

「それであんなことを企てたからにはそれなりの“作戦”があつたんだよね？」

私は立っていた。

とうにか仁王立ちだった。

「うん、まあ本当にちゃんと色々と計画はあるんですよ？仕掛けはもう終わったし。」

……あと水無月さんまずその振り上げた拳を下ろして」

眼前のナガルは座っていた。

とうにか正座させられていた。

……私に。

「あ、ああ、ごめん」

とは言っても額の青筋と口の端のヒクつきを抑えられない。

「それにしてももう少しやり方つてもものがあつたんじゃない？」

「……せめて私に一言かけておくとか、ね？」

「うん僕が本当に悪かったと思いますだからその握った拳を開いていただけなくてしょうか怖いですマジでっ！」

「あ、ごめん無意識だった」

あは、あははもう限界なんでしょうかね？このイライラ、全てぶつけないと収まらないかも。

「……でもその前に。」

「じゃ、聞かせて貰えるんでしょうね？今日の“策”ってやつを」

「イエス ユア ハイネスっ！」

「返事だけはいいのよね……」

今の私なら“恋する自分”を完全に抑え込んでネチネチといくらでもナガルを怯えさせれたかもだけど。
詳しい意味はよく分からないが「妃殿下ユアハイネス」という響きが何となく気分が良かったので許してあげた。

「じゃ、サクツと説明しちゃおうか。あ、ミハルちゃんもついでに

起こしちゃって」

言われて気づいた。ミハルちゃんブラックアウトモードだったんだよね……。

ナガルへの怒りで完全に存在を忘れてたのは流石に私も酷い。

ごめんなさいミハルちゃん、と内心罪悪感を感じながらミハルちゃんを起こす。

「ん……ふ？あれ……ナガル先輩がどうしてここに？
オ シロさまの祟りは何処へ？」

二、三言かけるとミハルちゃんも気がついたようだ。
……だいぶ混乱はしているようだけど。

「ミハルちゃん、大丈夫？頭とか打ってない？」

「あ……はい。大丈夫です水無月先輩。ご心配ありがとうございます」

ペコリ、とミハルちゃんは頭を下げる。その姿はハムスターを思わせる可愛さだった。

「良かった。そこが凄く心配だったから……」

言いながらナガルの方をジト目で見ると、気まずそうに目を逸らされた。

全く、あのバカだったら無茶苦茶だよね……。

「それであるこれは一体……」

「え、そ、それは」

「その説明は僕からしようか」

私が言葉に詰まるとすぐにナガルが話中に現れる。

……始まるのかな。魔王の『嘘』劇場。

ジト目は崩さず、私はナガルの話に耳を傾けた。

まずピアノかな。コレ、勝手に鳴り出したでしょ？」

「あ、はい。あのやっぱりこれは呪われたピアノで……」

「コレ、あれだよ。自動演奏装置つきのピアノなんだよ」

「……………はあ」

ナガルの言う完璧な言い訳とやらを聞いて私から出てきたのはその

二文字だけだった。

(水無月さん、それは納得の『はあ』なのか呆れの『はあ』なのかで僕の努力の報われるかが決まるんだけど!)

小声のコンタクト。

それに対する私の答えは決まっている。

(呆れに決まってるでしょ!!なにそのくだらない結論!それならまだ正直にアンタが弾いてたって言った方がいい気がするわよ?)

(……ここに住んでる事が露見するのを避けたいからこんな苦勞してるんだよ)

(あ、ああそっか……。でももうちょっとマシな言い訳は無かったの?)

(うーん、でもミハルちゃんは納得してるみたいだよ?)

「は!?!」

パツと振り返るとそこには、

目をキラキラさせた後輩が一人。

「すごいです!そんなピアノがこの学校にあったなんて!コレはコレでネタとしてはなかなかですねっ!」

え、ええー……。

(……いいのナガル？こんな純真な後輩騙して)

(うぐつ！で、でも僕だつてこのピアノ手に入れるのに突貫で物凄い交渉と努力をしてるからね！？それを少しぐらいねぎらつてくれても……)

(バカに何を言ってもムダだし)

(うわーん水無月さんのツンが今日は凄く心をえぐるよ!?)

ぐずぐずと泣き出すナガル。

ホントに……彼には退屈しないものだ。

……良い意味でも悪い意味でも。

「じゃあ、肖像画の方は何が原因だったの？」

いいかげん泣き真似(決めつけだけど)がうっとおしくなつたためナガルに種明かしを促す。

(………)

何だか切なげな視線を返された。もしかして拗ねてる？

子供かアイツは!？でもここで突っぱねても話が進まないんだよね。

(………わかつたわよ。もう何も言わないから自由に行つてきなさい

！)

(イエス ユア マジェスティ！)

いつの間にか扱マジエスティいが皇帝になつてた。

……もう、気にしない。いちいちツツコンでいられないもの。

「あの怪異の種はアレだよ！

肖像画の目に刺さつた画ビヨウが原因だつたんだ！」

(……………ナガル？)

(ひっ！？な、何も言わないって言ったじゃん！)

あああ頭が痛くてもう倒れそう。大学でてるって言つてたよね？その頭が弾き出したスケープゴートがこれなの！？逆にこれでいいのナガルは！？

とかなんとか叫びたかつたけど、何とか全て飲み込んで一つの大きな溜め息に変えた。

(はああああああ……………)

ストレスを一気に体外に押し出した、途端にお約束。

（ハッ、まさか水無月さんかめ め波を会得……）

（してるかつ！）

また頭がクラツときた。

しかし、この言い訳のクオリティがビックリするほど低いため流石にミハルちゃんが見破るのを私も覚悟した。ただどやっぱり最強の天然は凄まじいわけで。

「まさか……こんな単純なトラップに気づけなかったなんて不覚ですっ！切腹です！果てます！」

「「果てるの！？」」

ナガルとツツコミが被るほどの天然純真回答っぷりだった。

（うっ、確かにミハルちゃんのキラキラした瞳を見てたら凄い罪悪感が……）

今更のような事を言われても……。

(別にばらしても問題はないんじゃないの？きちんと口止めをすれば…)

そう提案してみると、

(うーん、まあそれでも良いんだけどね。でもあんまりそれがおっぴらに知れると、……実家が五月蠅くてね)

そこでいつものナガル樂觀的な雰囲気が掻き消え、重い空気が漂い出す。

……スゴく珍しいことのような気がした。

(実家？ナガルの？)

(うん。あっちからはちゃんとした別宅に住めって言われてるんだけど、そこって“監視”がキツくて全然“愉しくない”んだもの)

まるで監獄だよ、とナガルはポツリとこぼす。

(だから出来るだけ内密にしたいんだ。何処から漏れるか分からないし)

(漏れるとどうなるの？)

(あんまり考えたくないね。もしかしたら余計なお目付け役が送られてくるかもしれないし、悪くすると実家に引き戻されるかもしれない)

(っー!!……そ、そっか)

知らなかった。そんな背景が有ったなんて……。

(ナガルって苦労してるんだね)

(んん！？何突然？)

(いや、……なんでもない)

(ん、そ、そう……)

(うん……)

(……)

(……)

突然の身の上話に私だけじゃなくナガルまで黙ってしまった。

「見出しは何がベストなんでしょう……？。ピアノをメインに特集を……
あ、でも他の七不思議によっては構成かえないと……ミハル久々にみ
なぎってきたですっ！！！」

(……)

(……)

記事の構想を練っているのか不思議なテンションで眩きが爆発しているミハルちゃんを尻目に、微妙な沈黙が二人を襲う。

その沈黙の中で思った。

……私って（当たり前前だけど）ほとんどナガルの事知らなかったんだな……。

少し胸がちくりとした。

「あやしい雰囲気ですねお二人さん」

「ほう？な、ななななっっ！！」

その沈黙を破ったのは……何処か遠くに行っていたはずのミハルちゃんだった。

「帰ってきてたんだねミハルちゃん」

「ラブのニオイがすれば何処までも追いかけます！」

何というか人生が楽しそうなコメントだった（主に残念な方の意味で）。

「……人生楽しそうだね」

ツイートが私の思考とかぶる。ナガルも同じ事を考えていたらしい。
……無駄なシンクロだわ。

「えへへへ。そうですね？……照れます」

「いや、褒めてないから」

閑話休題。

「じゃあ、他の不思議の所へ行ってみましょうか！」

例のごとくミハルちゃんが元気よく叫ぶ……影で動きが固まる魔王
が一人。

「えっ！？これで満足できてないのたまわれる感じでしょうか？」

……尋常じゃないほどの汗をかいてるナガル。また何かあるんだろ
うか？

「ナガル、言葉変になってるわよ？」

「いやいや何でもないよ水無月さん！別に色々準備終わってないとか証拠隠滅がまだ完璧じゃないとかそういうことじゃないからね？
絶対そんなこと無いんだからね！」

「…………はあ」

やっぱコイツバカだ。

「じゃあどうするのよ。まさか準備ができるまで待ってもらつとかそんな事じゃないわよね？」

「へえ？その通りだけど。足止めが水無月さんのミッションだから」

「…………は？」

「あ、ちよつと僕トイレに行くから二人ともここで待っていてくれる？」

え、ええええええっっっ！？

「分かりましたです。二人で待ってます！」

「ナガルちよっ！」

…………本気で行きやがったあの野郎……！引き留める私の言葉も何処吹く風って結構非道くない？

「暇になってしまいましたね」

「あー…………うん。そうね」

足止めって…何をすればいいのかな。何か話題でも振って盛り上がってればいいのかなのか。

…私、人見知りなのは分かっているのかなナガルは？

「み、ミハルちゃん。じゃあ女の子同士だし何か話でもしてまっつてよっか」

うん。そこそこ自然にいった。内心ちょっと安心しながらミハルちゃんの反応を待つ。

でも失念していたのが彼女の性格で。

「じゃあ、ナガル先輩との関係についてディープなお話を……」

「だだだ、だからそれは違うっていつてるでしょーっ!」

私の叫びは音楽室に傳く霧散して。

*

そのままこつてりと質問攻めにされたのもつかの間、ミハルちゃんも「お花畑に行く」とのこと。音楽室はさっきとは違って変わってとても静かだ。

嵐の前の何とやら、じゃなくて台風一過？

私はピアノの椅子に座りながら二人の帰りを待っていた。

……しかし遅い。

ミハルちゃん行ったばかりだから仕方ないにしてもナガルがかかりすぎだ。一体どんな仕掛けを仕込んでいることやら。

ぼー、っとしていると静寂が体を包んでいくのが分かる。

寮にいれば必然的に聞こえるテレビの音や、誰かの話し声も聞こえない。

何処か頼りない電灯を見上げると切れかかっているのか、突然明滅を引き起こした。

「つつ！」

あれ、私なんか怖がつてる？いやいや、私どんだけ単純なんだよ！
つつつつこみに答えてくれる人はいない。

シーンとした室内。

ああ…なんだか昔、映画館に青いネコ型ロボットの映画を見に行つたときに予告で見た「学校の怪談」を思い出してしまう。

あれは子供心になかなかの恐怖を植え付けちゃうと私は思う。

あの後しばらく一人で風呂に入れなかったもんな…。

だからホラー!!ダメ、ゼツタイ。

ジジ・ジジジジ・・かたん。

「つつつつ!!!!!!」

飛び退いた。2、3Mほども。

…だってびっくりしたから!急に変な音が近くでしたから!

……その音は数秒後になり止み、音楽室に平穩が戻った。
私は一人のままだけ。

「いやー…別に怖いわけではないんだよ私はでもちょっと気味が悪くなるくらいはあるし心細いつて事もあるからミハルちゃんがいるとおぼしきトイレに行こうかなっておもったりしたりして…」

馬鹿馬鹿しいのは分かるけどやっぱり怖いものは怖いのだ。

まあ、誰も眩きは聞いてないだろうから大丈夫だと思っただけ…

ジジ・ジジジジ　　がたがたがたん!!

「つつつつ!やっぱり無理ー!」

それが長い夜の始まりだったなんて。

半泣きで部屋を出るそのときの私は知るよしもなかった。

先輩はどこにいった？

*

「ふっ……」

と息を吐いたわけですボクは。

アンニュイな感じが大人……って雰囲気醸し出してる気ではいるんだけど、同級生の友達にそれを言ったら軽く流されて悲しかったですよ。

はい、そんな感じで初の「ボク」視点。舞台はトイレから始まりますです！

……とはいったものの。

「あのー水無月センパイ？何処ですかー？」

早速プレジデント、あ、いやアクセシデント勃発です。

待っていてくれると思っただんですが音楽室には誰もいません。

そこにはぼっぴんと懐中電灯が一つ。

んーどうすればいいんでしょうか？

ナガル先輩は何処に行ったのかわからないし……、水無月先輩も行方不明……。

ん！？これは……もしや……。

「まさか……七不思議の呪い……!？」

七不思議を全て知ると災いが降りかかるといふのはよくある話！

これは……大スクープ……!？

なんては思いません。

「ケータイ……は番号わかんないですしね……。警察？あ、でも先に職員室？」

わたわたとボクは暗い廊下を歩きだしました。

あるのは七割の心配と二割の恐怖。
そして一割の好奇心（スクープ魂）。

ボクは鼻歌（カウボーイビップのテーマ）を歌いながら、職員室
に向かって歩いて行きます。

「流石に怖いですね夜の学校は……」

廊下をただ歩いているだけでも恐怖のほどはなかなかのものです。言うなれば奇跡的な個体値のポケットに入るモンスターをようやく手に入れて、ポケンセンターで回復してからセーブしようと思つたら、不用意な振動で画面がフリーズしたあの時。

やっと討伐できた！と思つた瞬間に、不意に死角から草食獣の突進を食らつて死んだあの時。

涙を垂れ流したギャルゲーのデータが完膚無きまでに真つさらになつていたあの時。

あの瞬間に背筋に走る感覚。まさにそれです。たぶん。

……泣いてないですよ？悪魔でこれは心の汗DEATHから。。。

そんな事を考えながら一人で歩く途上。何だか廊下に物音がします。

(これは……声？誰か居るのでしょうか？)

くぐもつた響きのした部屋の方を見るとそこには、

“生徒会室”

ボクは、「はあ……」と嘆息してその部屋を仰視します。

(こんな時間まで何をしているんでしょう?)

普通に考えれば仕事です。でも相手はあの生徒会!

どんな残響死滅^{エコーオブデス}…じゃなくて残虐非道な行いをしていることか!

「部費に備品のカメラまで回収されてしまいましたし……血も涙も無い連中です!」

そんな恨み節を呟いた瞬間。突然でした。

「……なやり方を続ければ生徒会は信用を完全に失ってしまいますよ!」

「ひっ!?!」

驚いた時に少し声を出してしまって、慌てて口を押さえます。

気づかれていないかそつと周りを伺うと、……大丈夫なようです。どうやら“その”生徒会が言い争いをなさっているようでした。

(あの声は……副会長?)

怒号は間違いなく男性のものでした。

それはまだ続いてきます。

「あの決算書を理事会に提出すれば全て済む話じゃないんですか？」
痴話喧嘩…な、はずもないのは流石にわかります。

「こんなのいつもの会長らしくもない」

「お前は俺の何を知っている？お前は俺の指示通りにしていればいい」

「……でもっ！」

副会長の顔は見えませんが声はかなり腸を捻切るような痛々しい響きを、その時、私は、感じました。

「僕には会長がわざとその犯人を庇おうとしているようにしか思えません！一体…何が会長をつ！」

「……黙って私に従えないならここから出ていけ。使えない“手駒”に用はない」

「くっ！！」

副会長は判断を迷ったのでしょうか、十秒くらい無言の時間が過ぎます。

「……………失礼します」

（わっ、わっ！出てくる！？）

ボクはわたたと柱の影に駆け込みます。

（ひゃうっ！コレ結構ピーンチですー！？）

コツコツコツコツ……………。

足音は次第に近づき、ついにボクを見つけ立ち止まって声をあげ…！

124

（逆方向に行ってくれて助かりましたです…）

たりはせず、次第に遠ざかる足音を聞きながらボクはホッと一息をつき、今の会話について推理を始めていました。

（副会長が言った「会長は“誰か”を庇っている」って……………一体何のことなんでしょう？）

それがわかれば全部分かるんですが、そんなに都合良くはいきませ
ん。

（仕事のミスとかでしょうか？）

でも“あの”会長がわざわざ庇おうとするような人がいるなんてに
わかに信じがたいですし……。

(何かのスキャンダル?)

それはそれで燃えますが、そんなに重大な事柄を生徒会長とはいえ
一人の生徒が握って隠し仰せるとは思えませんし……。

むー、全然わからない……。

少しポーツと考えていると、…ちよつと眠くなって来てしまいました。
た。

でも気を抜くとやって来るのはやっぱりサプライズで。

ガラっ…!

(…!!!今度は会長!?)

また急いで柱の影に隠れます。

カツカツカツカツ…!

(しかもこっちに来る!?)

足音はかなり早く、どこか急いでいるような様子です。

(どどど、どうしたらっ…!?)

焦る間にも会長は近づいてきます。

必死で辺りを見回して、この危機的状況を打破する何かを探しますが、

……そんなもの都合よくその辺に転がってるなんて奇跡があるはず……。

その時視界に映ったものは！

*

「……………」

カツカツカツカツ……………。
カツン……………。

「???何でこんなところに段ボールが置いてあるんだ?」

「……………(機能停止)」

「……………まあ、いいか。明日片付けねば」

カツカツカツカツ……………。

回避成功しましたです。

何故あそこにスークさん御用達の段ボールが置いてあったのかは甚だ謎ですが、結果オーライです。

そのそばに医療キット×3とアルファベット三文字の粘土みたいなモノが置いてありましたが、それは装備せずちゃんと破棄しました。

「任務、完了…」

ヒイロつぼく小さく呟いた後、辺りに誰もいないことをちゃんと確認します。

さてさて。

ここで現れた選択肢は2つ。

- ・このまま職員室へ直行。
- ・生徒会室にて健全な取材活動。

……。

ピッ。

無言で下を選択し、ボクは生徒会室の扉の前に立ちました。

く……こうやって立つとどこことなく威圧感をひしひしと感じます。

(でも負けないです!!)

勢いよくバンツ！、とはいかずそつと静かに扉を開けて中へ。

きー…がたん…。

すると、初っぱなから第一村人…げぶん、第一目標を発見です。

(カメラちゃんこんなところにあつたんですか!)

放課後に来たときには気づきませんでした、部屋に入って右側すぐのガラス棚の中段辺りにちょこんとのつてました。

急いで取り出して装備します。

……。「めいちゆう」があがった気がしました。

(まあ、それはいいとして)

ボクは第二目標探索に入ります。

資料庫。

膨大な量の紙で埋まっていて、もはや何だかわからない状態に。

後回し。

没収品で埋まった棚。

ラインナップが明らかにカオス。

（機巧魔神の入ってそうなトランクケースに少年伯爵が入ってそんなトランクケースや仮面戦士の変身ベルトが覗くトランクケースなど）

……何でこんなにトランクばかりなのかも謎です。

後回し。

じゃあ残るは……

（机の上、ですか）

机上、それは部屋の半分に割るように設置された机にぼつんと置いてありました。

……あんまりにもあからさまで面白くないので、行数を稼ぐため……
げふんげふん！、発見をドラマチックにするために最後にしたので
す！

ペラリと置かれた一枚の紙。
ここに……秘密が？

“あの”生徒会長に一泡吹かせるチャンスでもあり、新聞部の汚名挽回のチャンスになるスクープ……!?

(汚名返上、または名誉挽回です)

おそろおそろ、手を伸ばします。

(ええいつ！一気に入っちゃえです！！)

パツ！！と紙を裏返すと、そこには予想通り、文字の羅列が。やっぱり機密文書か！……と思いきや、

(ん……？これは…… 『学校運営資金口座一覧』？何でこんなものが？)

そこにあっただのは口座にあるお金の、しかもかなり大きな桁の資金の動きをプリントしたものでした。

(これが、機密です……？)

この表のどこに会長が誰かを庇う要素があるんでしょうか？……謎です。もしかしたらこれもハズレなのかも。

(そう簡単にはスクープは手に入らない、ということですか……?)

その紙を机の上に戻し、

諦めて生徒会室を出ようとした、

その時、

その瞬間に、

(ん?……んん!?)

その表の一部が、何かの不自然なことに気づきました。

(法人としての収支は合ってる……“けど”、この『綾波財団特別寄付金』って別の口座に全額振り込まれて……無くなって?)

それは“多額のお金”、でした。

ボクの想像を超えた事柄に頭がクラクラするのですが、頑張って資料を見ていきます。

(“生徒の学業振興を目的とする財団からの援助”。でも、実際には……)

学校運営に使われた形跡はゼロ。お金は何処かに横流しにされて消えている。

その、淡々とした事実。

(一体：誰がこんなことを？)

焦点はそこです。生徒会の二人の会話では、犯人の目星はついてい
るような口振りでしたし……。

(校運営に関わる人なのは間違いありません。教頭から校長：理事会
の“誰か”……。もしかしたら理事長自身とか？)

姿は謎とされる理事長。怪しさ満点。スクープ性満点の相手。

(こうしてはいられません！早速部室で記事を……！)

その時のボクは、水無月先輩達のことをすっかり忘れるほど興奮し
ていました。

その罰が当たったのかもしれない。

ボクは背後に立つ人影に全く気づいていませんでした。

振り向こうとした時には、

もう、

口に布が押し付けられて、

何かの薬品のような匂いが鼻の中に広がって、

もがこうと手を必死に動かしても押さえつけられて、

だんだん……意識が朦朧としてきて、

そして……ボ……クは……。

> S t a r t o f D A R K N I G H T . . . <

先輩はどこにいった？（後書き）

合格した〜！

さて、急にシリアス展開です。

お金関係の話はドロドロして好きなのでノリノリで書きました。

続きはまた明日更新します。

離島症候群

*

散々だ。

考えるのも面倒なくらい、今日は散々だった。

朝は、いつも食べるソ ジョイとウ ダーが売り切れだし。

昼は、不審者が侵入とかいうデマにまた昼食を食べ損なうし。

そしてなんととっても放課後は、……“アイツ”だ。

不意打ちで来やがったし。

全然予想外に来やがったし。

……醜態さらしちまったし。

そつえば最近、屋上に行っていないことに気づいて頭が少し痛くな
った。

そんなことを考えながら、オレは廊下を進む。

目的地は“アイツ”の所。

(そういえばアイツの所にも行ってなかったな)

愚痴を言えるのはアイツだけだから、最近は溜め込む一方だったと気づく。

アイツは途方もないアホだが、面白い人間であるのも確かだった。

(無駄話があんなに面白いものだとは、……中学までの俺は知らなかった)

しかし今日はそんな軽い話が出るはずもなく。
今日の結果、金輪際それも出来なくなる可能性すらある。

そんな“告発”^{はなし}。

「……………バカ野郎が」

そんな呟きは誰に聞こえることもなく、暗い廊下に溶けていった。

*

(理科室……。こんな時間だが、ここに寝泊まりしているって言うてたよな)

校内にたいした距離もあるわけもなく、すぐに着いてしまった。

その部屋は、窓という窓に全てカーテンがしてあって中が窺えない。なのでここからは明かりの一筋も見えなかった。

しかし外観は存外普通なんだよなこれが。中に入ると相当面食らうが。

(本屋並みの蔵書【注・マンガのみ】とか、あのソファは流石に興味を疑うし。何を考えているのかもわからんからな)

付き合いは一年ちよいになるが、サラサラよくわからない。頭はいいクセにあの言動、行動。果てには暇潰しに何でも屋まがいのことをしているとか。

(……まあ、わかるうともしていないが)

この一年でわかったのはそういうことかも知れない。

(他人の理解なんて、ある程度で十分だ。少なくとも“俺にとって
は”)

一般論は聞きたくない。普遍化した論は薄っぺらく感じる。

(アイツにとっての“生きるための哲学”は“快樂至上主義”。なら……“オレは”?)

一年は短かった。でも二年でも三年でも、何年かかるうと見つけようと思っていた。

“アイツ”がそばにいるなら。

(それが、今日で終わりになるかもしれないんだ……)

なんて、他愛のないことを思ってなかなか扉を開けずにいる自分に気づく。

激しく顔をしかめた。

(ぐずぐずしていても埒が明かないな。……行くか)

ノックも何もせず、勢いよく扉を開く。

*

最初に気づいたのは、部屋に明かりがついていなかったことだ。

と、思ったら急に視界が明るくなった。

どうやら人が入ってくると自動的に明かりのつく仕様らしい。

(本当に無駄な事が好きなヤツだ)

呆れ混じりに息をつくと、次に目についたのは主人が不在の金色のソファであった。

「留守　か？」

それにしてもあまりにもタイミングが良いが。

(それともオレのタイミングは悪いのか)

どちらにせよ無駄足だった。

(仕方ない。出直すか)

また散々な日の記録更新かと、肩を落として。でも何処かでホツとしている自分がいる気がして。

そんな、複雑な感情を抱えたまま身をひるがえ翻したその時、扉の内側に貼ってあった紙に目があった。

貼り紙。

そこにはこう書かれている。

【魔王さんはお出かけ中です。お急ぎの場合は化学実験室まで】

.....。

(外に貼つとけよ……)

シッコミは無言のうち。

*

苛立ちのままに乱暴に扉を閉めて理科室を出る。

(なんだって今日は本当に面倒なことばかりだな)

それに、なんとというか……“心が”、落ち着かない。気持ち悪い。

言うなれば、

(嫌な予感、嫌な気配。それしかしない)

シックスセンス
第六感シックスセンスは信じてないのだが。

その瞬間、ほんの一瞬だった。廊下に“何かの音”が響いた。

“ひっ……、……ヤッ……”

そんな、“音”。

聞き間違いかもしれない。だが女の、悲鳴のようだった気も……？

(気のせいか?)

疑えば疑うほどに今聞いた音が空耳だったような気がして。

本当は一度戻れば良かったのだ。

結論はそれだけなのだ。

その時のオレは、あの報告書に夢中だった。

止まった足はまた進みだし、振り返ることもなく進んだ。

これも一つの選択。そしてこれによって、物語はさらに加速する

*

化学実験室。

こんな時間……もうそろそろ9時になるが、ここで何をしているだろうか。

鉄面皮と呼ばれても。
誰かが離れていっても。
揺るがない哲学を持って。
“生徒会室の女王”として。
落ち着いた、平素な気持ちで。
飄々としたアイツのように……。

関係の断裂も恐れず進んだ。

そこには、

『人体模型』があった。

……………目の前に。

「はっ。」

わざと鈍らせた心からかろつじて出てきた言葉そんなもので。

次の瞬間にはそれが、

うう…いて…？

ゆっくりとじちぶらじ、

向かってくる？

そんな急激な場の異常に、次に出てきた言葉は、

「ぎゃ…キヤア

！…！…」

不覚にも、言葉ですらなかった。

離島症候群（後書き）

福島なので地震（3/11）の影響をもろに受けて更新遅れました。家から出れん……。次の更新もいつになるか微妙です。気を長くお待ちください。

ライブアライブ

*

「きゃ…きゃア

！…！！」

ぺたん。

尻餅。

床が冷たい、なんて思う余裕もなくて。

驚愕の声（断じて悲鳴ではない。これ、重要）の後。

ただ驚きのままに、突如襲来した物体を見つめた。

視界を埋め尽くしているのは、半分剥き出しの赤い筋肉、グロ目の顔。

どうして化学実験室にこんなものが？高校なら生物の教室じゃないか…という疑問はさて置いて。

それが不自然に軋みをあげながら蠢いている。

あり得ないものが動くこの状況。

訳がわからない。なんだコレナンドこれナンドコレ???

そんな問いかけに答えてくれる人なんて、

「コレの動き何か巨 兵っぽいよね」

「あ、ああ。でも俺は最初八 テで既出のネタだと思ったけどな。

.....おい

“いた”。

ああ.....オレとしたことが。
一瞬でも忘れていたとはな。

この“馬鹿”を。

「……………チューチュー」

……非常に無駄なあがきを感じた。

「ああ、何だネズミか……ってなるかつ！サツさと出て来い！」

「……………」

答えはない。命令に対して無言。

そういえばコイツにこういう時の対処法、教わったんだっとな。

「十秒以内に出てこい。きやがらねえと……分解バラすぞ？（ドスの最高に効いた声で）」

「ひひひひひっ！コメンなさい！」

すると、あっさりいぶりだされた獲物あやなみが一匹。

とりあえず顔面を全力でアップercット。

……スッキリした。

*

……はい。アップercットを食らって、きりもみしながら吹き飛んだ綾波です。

久々の『僕』視点なのに吹き飛んでるよ。宙を舞ってるよ。重力加速度を感じながら地に落ちると、尋常じゃないくらい痛かった。

でもそれだけは叫ばなければならないことがある。それを言うのが二回目だろうと！

「殴ったね！？親父にもぶたれたことないのに！！」

「、」

一瞬の冷えきった間の後、
すう、と息を吸ったシズクちゃんから出た言葉は、

「うるせんだよド素人がっ！！俺だって勇気だしたんだよ！でも何
なんだアレ、舐めてんのか！？」

ゴスツ、ゴス、ゴスゴスツ！

「五度もぶつた！…じゃなくて、ちょ、ちよっ待っ！痛たさが！？
痛たさが笑えないレベルだよ！？」

「……Salvareooo」

「シズクちゃん何か悪ノリしてない？それ日常で唱えるタイミング
なんて普通ないよね！？」

「いけませんね。『怒り』は七つの罪の一つだと、そう教えられた
はずなのに」

コキ、コキ。もはや元のキャラなんて崩壊したご様子で指を鳴らす
シズク様。

いやちょっと待って！？冷血クールで売るって方向じゃなかったんですかー？

でもそんなことは聞けないので、取り敢えず後退り。あしすま
退却魂（生き延びたい）は、まだ持つてるぜ！！

「あんなに悲鳴は可愛いかったのに、その後の反応がキツすぎだよ！」

「だからっ、それを忘れやがれてんだー！！！」

ドゴッ！

「ぐあああっ！な、何で僕の周りにはこんなに照れ隠し暴力キャラが多いの！？」

「だからアレは、……違うから早く忘れろこの馬鹿！叩けば忘れるようなアホだったろう貴様は！」

「その赤面は可愛いんですけどねえ！ていうかそんな古いテレビみたいな扱い！？それに攻撃がっ！無駄に、洗練され、て、ぐふおっ！？」

その後五分ほど、

ギャグマンガみたいなのりで、だけど全然ギャグじゃない威力でしばかれました。

*

「御免なさい御免なさい僕が悪いです御免なさい御免なさい生まれ
て御免なさい御免なさい御免なさい死んでも御免なさい御免なさい」

「……足りんな。もっと誠意を見せやがれ」

「くっ……、水無月さんの時とは逆の立場になるとは……！」

「あ、あ？」

「すみマセンでしたー！」

女の子に向かって土下座をして謝る男子高校生がそこにいた。
というか僕だった。

「うっ……僕が悪かったって言うてるじゃん。そろそろ機嫌直して
！……あ、そうだ。なんか僕に用事あったんじゃないの？それでこ
こまで来たんだろうっし」

よし、我ながらナイス話題そらし……！……と思ったら、

「……………」

一転、絶対零度の視線が僕を射貫いていた。

「な、何……………？」

「……………」

急激なシリアスモードへの転換に戸惑いが隠せない。

(じゃあ、モードチェンジ?)

クロックアップして、一瞬でそういう、『かお』に変える。それか蒸着とかでもいいけど。

そして対峙する。

魔王と、女王、が。

……………僕側の心構えは微妙だけど。という訳で『僕』視点、もう終了？

*

まさか。

まさか、コイツから話を振ってくるとは思わなかった。

だから、顔が一瞬で凍りついてしまった。

浮かれてかけていた心は、また、冷たく落ち着く。

……俺はアイツを直線的に、真っ直ぐ見据えた。

そして冷静になって思うのは、……コイツは

コイツは本当に“あの”着服に関わってるんじゃないか、と。

(注・綾波は何も考えていません)

だから。

だから、わざとこの話をし始めたんじゃないか、と。

(注・綾波は本当に何も考えていません)

そう思うと、いま目の前に居るコイツが急に得体が知れなくなっ

(注・綾波は“はねる”をしているコイキグ並みに何も考えてい

ません)

だから、何も言えなくなつて、無言で、見つめ合う。

……

……

…

あの『紙』のコピーは、ポケットの中にあつた。
自然と手は、そこに向かう。

カサリ、カサリ。

無機質な手触りはただの紙のそれだが、コイツにとって、……俺にとつても、これは『爆弾』だ。

ここでこれは爆発してしまうのだろうか。

それは出来るだけ考えたくなかったが、ここに来て余計に疑わしい

キュツと、唇を真一文字に結ぶ。

頭の中で何度もシュミレーションした言葉。

それを、

喉の奥で反芻し、

遂に、俺は

I was a lonely girl. I even tried to give up living. She gave me some word. It is so strange and stupid. But...

パサリ。

広がった、紙が。綾波の前に。

「……これは、貴様が関知する所にあるのか」

「……」

綾波はそれを手に取り、表情を険しくする。

その何気ない仕草を俺は固唾を飲んで見守る。

……そして、その口から出た答えは、

「え、なにこれおいしいの？」

「……………まあ、ある程度想定通り、か」

綾波の今の反応。

あくまで『希望的観測』の方の『想定』ではあったが。

「嘘は、つかないんだよな？」

「……？僕は基本的に面白くなりそうな時にしか嘘はつかないよ？」

「それもどうかと思うが……そうか」

ふ、と溜め息をつく。

杞憂、だったか？

と、ホッと胸を撫で下ろそうとしたその時、

「……！！これは！！？」

「……どうした？」

「この明細書、一体何処で？」

「ああ。……それは貴様の部屋にあったものだぞ？」

「へっ！？」

「他の書類を貴様の部屋に取りに行ったときまぎれたらしい」

「へ、へえー。……あ、僕の部屋って『理事長室』のことか」

「……他に何処がある？貴様はあそこでしか仕事をしないんじゃないかな
かったか？」

「……………そうですね」

「……………？」

何だ何だ。反応が随分と遅くないか？
綾波らしくもない。

ジッと、綾波の顔を見つめてみる。

すると、あることが感じて取れた。
あの様子。あの顔色。そしてあの頭の鈍りよう。

「何日目だ？」

「え？」

「だから徹夜を続けて何日目だと聞いている」

「……………分かる？」

「バレバレだ」

ボサボサに伸びた（俺がいつも切れと言うのだが聞かない）髪の毛のせいで目の辺りが隠れているが、多分あの下には隈くまでもできているんだろう。

「……………また仕事を溜めてたのか？」

「い、いやー？今季は豊作だぜとか言っただけで深夜アニメ見まくったり、何か急にマク スはテレビ版と映画版のどちらが正史か見極めたくなってチャンポンしてたとかそういうことはないよ？」

「……………バカが」

「ちょっと！？小声でポツリと言われるとかなり本気に聞こえるから！」

だから本気でそう思ってたんだよ！

……………は。本当にコイツは

「……………そんなに疲れてるんだっいたらあんな慈善事業みたいな依頼を受けなければいいだろ」

核心。そうだ。俺はそれを常々聞いてみたかった。

「自分の身を削ってまで他人の為に何かをすることは、貴様の言う『楽しいこと』なのか？俺にはそれは……」

「楽しいよ。自分の娯楽だもの」

「だが、それで自分の体を壊しては元も子も……」

「流石にそこまではしないけどね。まあ、学生に混じってアホみたいに騒ぐのも悪くないじゃん」

「……そうなのか？」

「んー？栗ちゃんも生徒会やって楽しいから続けているんでしょ？それと一緒にだって」

「そういうもの……か？俺は楽しんでやってるのか？」

「あんな“汚い真似”を？」

その瞬間、思考が急に冷徹に戻る。

“本題”はまだ解決してないではないか！綾波でないならいったい誰があの金を？

「貴様が知らないならこの紙は誰が……」

「ん？あ、それを作らせたの僕だったわ。いやーごめんごめん」

……………。

はあ？

「はあ？」

思考と全く同じタイミングで声が漏れていた。

「これは僕が個人的に人を使って調査させた結果なんだよ」

ん？……綾波が作らせた？

と、いうことは

「お前……まさか知っててこの事黙認してたのか？」

「いやいや！それは違うよー！」

俺が詰め寄ると、綾波は焦ったようにすぐさまそれを否定した。

「いや、その調査を依頼した人っていうのが今海外に出ててね。片手間にやってもらってたからFAXで結果が来たんだけど、………理^あ事長室がね………」

口ごもる綾波。

成る程。すぐ理由は分かった。

「あの“汚”部屋に置いていて混ざって無くした、ってことか。……本当に自分の興味の無いことに対しては無頓着だよな」

「ぐ……。だってあそこは生活するところじゃないし、仕事だけだから書類を並べててもよくない？」

「書類を“敷き詰める”、の間違いだろ。そんなだからこんなこと面倒なことになるんだからな」

はあ。本当に呆れたものだ。

冷やかな目で見ると、綾波はわざとらしく口笛を吹く真似をしている。

取り敢えず一回頭を叩いておいた。

ライブアライブ（後書き）

三か月ぶりの更新……。大丈夫なのかなコレは。

一応、主としてモバゲーで活動しております。

次の更新はいつになるのかわかりませんが、生存はしてますので！

M i s s i o n p o s s i b l e } b u t d i f f i c u l t t a s k

ハルヒの短編のタイトルからサブタイトルをつけてたけど尽きたので某泣きゲーのBGMからタイトル借用。意味は特にありません。久々にやったら徹夜でオーラスまで突き進んで号泣したとかそういうことでは断じてありません。きょうすけえーっ！！って一人で叫んだけど関係ありません。

「あ、そうだ。この件について生徒会の何人くらいが知ってるの？」

「……俺と副会長だけだ」

「副会長？あの女装が似合いそうなの？」

じよ……女装？

「お前は普段人をどんな風に見てるんだ……？」

「それと、その紙はこれ一枚だけ？」

「聞いちゃいねえし……」。

「それはコピーだ。原本は生徒会室オリジナルに置いてある」

「へえ……」

そうやって綾波は何かを考える素振りを見せて、よくわからないことを呟いてきた。

「その原本を偶然見ちゃった誰かがさらに偶然犯人がそこに来て鉢合わせをしちゃって薬を嗅がされて口封じに連れ去られたみたいな事件は起こってないよね？」

.....。

「.....まさか。漫画じゃあるまいし」

突然何を言い出すんだコイツは？そんな話普通はあるはずが無いだろっ」。

「そんな都合の良いような悪いようなヤツ居るのか？」

「.....さあ。何となくそんな気がしたんだよね」

珍しく歯切れの悪い綾波の言葉。またいつもの妄言だと思って俺はそれを頭の隅に追いやってしまった。それも、また一つの、俺の選択^{まちが}。

「それより犯人に目星は付いているんだろうな」

そう。これを聞かなければ意味がない。この事件を起こした犯人を、コイツは

「知ってるよ。たぶんシズクちゃんも、ね」

「それは誰だ」

俺が聞くと、綾波はニヤリと“愉しそう”な顔をする。……そして答えた。

「大して重要なキャラじゃないんだけど今日微妙にチラツと出てきて何か変な印象を残していった人、かな」

……………。

もう一発殴っていいだろうかコイツは？

「ハッキリ言え」

「ん？だって大体の人は分かるよコレで。というかもう察しがついてた人もいるんじゃない？」

「だからそれは一体……………」

誰なんだ、という後の言葉は呑み込んだ。

それは俺の目の前に何かの『名簿』が突きつけられたからだ。

電子端末に羅列された名前には、…………俺の見覚えのある名前がちら

ほらと見える。

「これは……」

俺が綾波を見ると、ヤツはコケリと頷いて、

「うん。これはこの学園にいる、綾波財団に所属する『社員』兼『教師』の名簿だよ」

社員、兼、教師？

「……公務員の兼業は禁止じゃないのか？」

「うーん、私立学校法人だから何とかなってるんじゃない？ほら、某北海道の学園でも『企業』の『スタッフ』が教師として入り込んでたし」

「おい理事長」

良いのかそれで？

「しかし、何故社員を教師としてここに送り込む必要がある？……まさかお前の“監視”の為か？」

訝しげに呟くと、綾波は大きくかぶりをふって否定した。

「まさか！僕が理事長になったのなんて最近だよ？……彼らはもつと前から居たんだよ。僕の父様がここの理事長だった頃からね」

「……貴様の、父親？」

初耳だ。そういえばコイツから家族の話聞いたことはなかった気がする。俺からもそういう話はしないからな。話といえば仕事だとか、綾波の好きな漫画がどうだ、とかそんなものばかりだった。

ふ、と軽く顔を歪める。

……肝心な事は、まだまだ、か。

「それで？」

俺は先を促した。

「んーと……あ、そうそう。その社員ってのは僕の父様の補佐の為に居たんだよね。と言っても仕事の殆ど全部をその人達にやって貰ってたらしいけど」

それを聞いて、だんだん理解が追いついてきた。その犯人の正体に。

「じゃあ、この名簿にある教師は……」

「かなり深く学園経営に関わってた、ってこと。
金口座を操作出来るくらいにね」

自由に資

学園を切り盛りするうちに見つけてしまった死角を、その教師は

ぬけみち

「複数犯か？」

そう聞くと、また綾波はかぶりを振る。

「いや多分一人だよ。それほど労力のいる事でもないし、単独の方が秘匿性が高いから。……多分そこまで考えてやってると思うよ」

そう言った綾波の顔は、何処か辛そうだった。

「綾波……」

そうか。良くも悪くも財団（けいだん）の関係者が犯人なら、その気持ちも……。

「だってこれだけのお金があれば漫画喫茶がたてられるよ!? □
ゼンメイデン伯爵には無理だったけど」

「……そんなことだろうと思ったがな。国営漫画喫茶は流石に駄目
だと思っぞ俺は」

ああくそ。綾波に対する基本的な対処法を忘れてた。
“コイツとまともに取り合つと疲れる”ってことを。

「はあ。俺も疲れた」

ドサツ、と座る。

……綾波の隣に。

「あ、あの……隼さま？」

探るような目でこちらを見てくる綾波。怯えているようにも見えないのは錯覚であって欲しいのだが。また嘆息が出そうになるのを抑えて、俺は少しばかりの勇気を出した。

「良かった」

ポツリと、あいつに届くように呟く。

「お前を失うかと思った」

俺が呟くと、何故か綾波は顔を赤くする。

?????

「ん、どうした？」

訳がわからずそれを聞くと、

「いや、隼ちゃんも大概無自覚に凄いことを言っから……」

……無自覚でもないんだがな。

「忘れる、とは言わないぞ」

「へ？」

「たまには正直な気持ちを言ってみようと思ってな」

「そ、そっか……」

……。

そうして言葉が途切れた。妙な雰囲気のまま沈黙が降りる。

と。

「あの」「おい」

……。

変に言葉が被ってさらに変な空気が深まった。

「ちっ　　何だ。気になるから言え」

オレがその空気に耐えられなくなって（暑くもないに変な汗をかいてきたし）綾波をせっつくと、言いつらそつに一言。

「正直ついでに笑顔とか見せてくれたりはないの？」

「……っ。調子に乗るな」

ちよつと内心動揺して蹴り飛ばしてしまった。

「ひでぶっ！！！！」

隣の丸椅子（学校の実験室とかによくあるヤツ）が派手な音をたてて転がっていったのが見えたが気にしない。

……………。

笑顔、か。

口角を上げ、表情筋を動かす。

それだけの、そんな活動。

「……笑ったほうが、いい、のか？」

そう聞くと、ゴロゴロ転がってしばらく動かなかつた綾波が、「寝不足だつて分かってんだつたら手加減してよ……」とか言いながらものっそりと復活して隣に座った。

いやお前は年の半分くらいは寝不足だろ、という言葉はつぐんでおいたのだが、

「良いと思うよ。あー…、あれだギャップ萌え？」

返って来たのはまた妄言。

「……聞いたオレが馬鹿だった。それより黙ってる、今顔の筋肉を動かすことに集中している」

く……、む……、キツイ……。

「え……？そのひきつけを起こしたラフレシアみたいな顔がまさか笑顔とか言っちゃう感じ……」

「ラっ……！言うに事欠いて人ですら無いのか……？」

俺だってそんなことを言われると普通に傷つくんだだけ……。

「……いや、鉄仮面って意味もあるけど」

「ん？」

「いや気にしないで。ただのツイートだから」

よくわからんが、それはそれでショックだぞ？

何となく“しゅん”としていると、綾波がニヤニヤした顔でこちらを見ていた。

「……何だ？」

仏頂面のままに聞くと、

「いやあ、シズクちゃんも随分柔らかくなったな、って。何となくそう思っただけだ」

「俺だって少しは努力してるんだ」

「努力？それってどんな？」

「……………ちっ」

それを聞くかと、思いながらも聞かれた事には答えよう。

「授業中の笑いのポイントとかで笑おうとしたり」

「どうせさっきのハ マハンマが出現したんでしょ？」

「歓談している連中の話を聞いて話術の勉強をしようとしたり」

「どうせ生徒会の素行調査（てきはじ）だと思われて逃げられたんでしょ？」

「生徒会でちよつと冗談を言ってみたり」

「どうせ冗談を理解して貰えなくて大火傷したんでしょ？」

「……………見てたのか？」

おかしい。殆ど当たり前なんだが。

「大体は予想がつくよ。シズクちゃんも大概不器用なもの」

「お前に言われたくはないな」

「あー……、確かにそれは同感かも」

……。

「……ぷっ」「……ふん」

また二人で顔を見合わせてしまった。そして漏れる“俺の中での”自然な「笑い」。

ああ、これだ。俺が失いたくなかったモノは。目の前には綾波の顔。一年前と、変わらない。

っ!!

「ナガ……!!」

自分でも何を言おうとしたのかは分からなかった。

ただ、心の動くままに声が口をついて出ていこうとしていた。

そんな時、幸か不幸か運命のカミサマは気まぐれで。

ガラッ！

「ナガルっ！…！どうしようミハルちゃんがいなくなっちゃっ……」

『て』。

いきなり室内に入ってきた女は、その口の形のまま固まっていた。

M i s s i o n p o s s i b l e \ b u t d i f f i c u l t t a s k

クライマックスまではあと少し、なのかな。もう少し続きます！

A d r o p i n t h e w a t e r (前書き)

このサブタイトルは某クリスタルヴォイスの歌姫が歌ってたパチンコの主題歌名なんですが、ものっそいマイナーなのにどうしてかすごく好きなので採用です。一度騙されたと思って聞いてみてくださいいな。

A d r o p i n t h e w a t e r

*

「……………」

くっ…………む…………重い。

「来たなっ！プレッシャー！」ってギョ イさんが感じる程の無言の圧力。重すぎる空気。どうしてこうなった？状況を説明すると、

- ・ 右の椅子にシズクちゃん。
- ・ 左の椅子に水無月さん。
- ・ 中央に、…僕。

『両手に花』とはまさにこういうことを指すんだろうけど。…何でこんなに居心地が悪いんだろう。

水無月さんは、ひきつった笑いのまま固定だし。シズクちゃんに至っては、絶対零度（-273 ℃）な無表情。今の二人の状態といたら。

あれか、あれだ。

クシャト ヤとクイーンマ サが睨みあってるみたい。うん。元の意味は『戦士』と『女王』でバッチリだし。

「誰がク ャトリヤなのよ！ってか何それ？」 「誰がクイーンン サだ！人をMSに例えるのは止める！」

地の文にまたつつこみを入れられた。

何だろう……。二人ともこういう時の息はピッタリなんだけどね。二人並ぶと学園二大美人が揃うから、クルーブレイカーにサバイバーでシールド五枚ブレイク！4000のダメージ！ずっと俺のターン！……みたいなの？

「そんな鬼畜は知らん」「????」

あー、でもつつこみ性能で見るとシズクちゃんの方が上かな？

「あれ？……でもクイーンマン ってMSなの？」

「知るか馬鹿」

でも反応が全体的に冷たい。

*

「それで……、水無月さんはミハルちゃんを置いてきたの？」

気になってたことを夜ズバツと聞いてみた。特に他意はありません。

「わ、わざとじゃないし！だってこわ……コホン。気味が悪かったから」

「おお、反応がチョー可愛いんですけどー。ヤバくね？チョコベリベリ？」

「何で急にそんな言葉遣いになったのかは知らんがチョコベリベは古い。じゃなくて。たしか……水無月、といったか？」

「えっ、あ、はい！」

急にシズクちゃんに話しかけられて、水無月さんがかなり緊張したのが見てとれた。

あれ？この二人これがファーストコミュニケーション？

「こんな時間に校内を彷徨さまようくのは校則違反だと知っていたか？」

「……あ、はい……」

「しかもまだ校内に生徒が残っているのも確かだな？」

「……はい」

「明日生徒会室に來い。始末書を書いてもらうことになる」

「………はい」

僕はポケットとしてたけど、ふと見ると水無月さんが口パクで何か言っていた。ん？なにになに？

(……私完全に巻き込まれて連れてこられてさらに始末書ってどんだけ報われないの？)

(あー、でもどっかの上条さんみたいにトラブルに巻き込まれまくるとハーレム形成できるよ？)

「んなこと知るか！」

おお、声にだしてつつこまれてしまった。

でも、水無月さんそのタイミングでそのセリフ……。

「……………ほう。良い度胸だな水無月茜。そうやって拒絶したのは貴様が初めてだぞ」

「え？あっ！いやそのちがつ……………」

うわー、お約束？

僕は思わずニヤツとしてしまった、
のを、見られて水無月さんに脛を思いつきり何の容赦も慈悲もなく
蹴られたのもお約束？

………大変痛うございました。

*

「んー…、じゃあミハルちゃんは今一人？」

「……ごめん」

「ん？それ僕に言っても仕方ないよ？」

こんなことなら携帯のアドレス交換しておけば良かったなあ、
と今更ながら後悔。
しながらも。

ポチポチとさつきシズクちゃんに見せてた電子端末を操作する。目
指す先は、

「『監視カメラの映像を再生』を選択。パスは……よし」

アクセス完了。
メディア再生。

と、思ったら、

『拒絶』

表示された二文字。

僕は最初、その意味が分からなかった。

もう一度同じ手順を繰り返してみる。

「パスワードを入力。『拒絶』………やっぱり失敗か」

パスワードが変更された？誰が？いつの間に？どうやって？セキユリティは全て書き換えたの？

さらに中を確認すると、そこには驚きが待っていた。

女としての自分（Casper）からの拒絶どころじゃない。

残りの全ても侵食されたみたいレベルの状況だった。

「………これはなかなかマズイかも知れない」

本心から、そんな言葉が漏れた。

「どづした？」

と、端末を覗き込んで来るシズクちゃん。

「うん。何か学園のサーバー全部支配されちゃったっぽい」

「………何？」

訝しげな表情をするシズクちゃん。

「それってピンチなの？」

そこに水無月さんが加わる。これでさらに密着して挟まれる形になっ
てしまったんだけど、

……とかく顔が近い。

しかし、本当に綺麗なんですがこの二人は。

明るく華やかな水無月氏と、クールビューティー桜野女帝。

……何か『ビューティー桜野』にすると整形クリニックの名前みた
いだね、という妄言は呑み込んだ。

そんな二人に見つめられ、何となく顔が赤らむのを気にしながら、
三度目のトライ、

「……あ」「にゃ」「え」

する、途上に急に別サイトに飛ばされた。

さらに最悪なことに、大量の無駄情報によって端末がフリーズする。

(セキュリティ？……いや。これは明確な攻撃、か？)

なすすべもなく手を止め、ちょっと考える以外ほかにない。

こんな芸当をするなら相手はもっとスペックが高い機材を使ってい
るのだろうか？

(そうなるとこんな端末じゃ太刀打ち出来ないし……。どうする？)

勝てるか？いやそれ以前に勝負にすらならない可能性すらある。

「……しかし、こうなると相手の『背反』は決定的、か」

明確に攻撃対象が理事^{ほく}長だつてわかつてるかは知らないけど。

あまつさえこれだけのことをやってのけたのだから。これは完全な
反逆、だろっかねえ。

「あの一…、ごめん。場違いかも知れないけど聞いて良い？」

その時、おずおずと水無月さんが手を挙げた。

「んん、何？」

「……その『相手』ってのは誰なの？」

「………」

「え、なにその空気詠めよ的な目は！し、仕方ないじゃない私途中
参加だし！」

「……はあ。その設定はもうシズクちゃんに説明済みだからそつち
から聞いてくださいな」

全く。もうバレバレな黒幕で引つ張つてもしやーないって言うのに。
嘆息しながら端末を弄っていると、……静かになった。

チラッと、シズクちゃんの方を見ると、……何で見つめ返しなさる

の桜野さん？

そこでトドメの一言。

「…………俺も分かって無いんだが」

…………。

ふう、と息を吸う。

「一回しか言わないからよく聞いてね。…………て言っかもつすぐ会いに行くけど」

犯人は

それを告げるために口を開いたまさにその瞬間、

…………タイミングどんだけ良いの？と問いたくなるような時に、

『ジ、ジジジッ。ザザ、ザーザー…………』

突然、天井のスピーカーから響く音。

「ナガル、お前か？」

「違うよー。でもこれはたぶん…………」

今回の『相手』。この学園を僕よりもずっとよく知る人。そしてこれはその人からの

『ザザッ、ザー……まだ校内に生徒は残っているかの？』

宣戦布告？

A d r o p i n t h e w a t e r (後書き)

区切りのいいところで切つたら一章分にしては短くなってしまいました。
した。

ラストバトル突入です。次の更新はたぶんすぐなので悪しからず。

i m a g i n a r y a f t e r (前書き)

KOTOKOさんの名曲です。前回のタイトルよりはわかる人が絶対にいると思いますが、本編の内容とは全く関係してないただの思いつきなので悪しからず。

*

「……………教、頭？」

あの声に聞き覚えのある水無月さんは、驚いたときに現れるお久しぶりの“あの”顔。

「あの野郎が……………」

シズクちゃんは憎々しげに天井を見つめている。

二者二様の反応をみながら僕は携帯を取りだし、ある番号へかける。

『リリリ、リリ、リリリ、リリ……………』

すると、スピーカーから電子音が聞こえた。

『リリ……………ピッ』

と、その音が途絶える。

……………何か自分で掛けた電話が取られるところを聞くのは不思議な感覚だよね。

とか思いながら電話口を自分の耳に当てた。

『夜分遅くに申し訳ないですのう、理事長』

スピーカーと、電話口で微妙にズレて聞こえる言葉はそんなものだ

った。

「そう思うなら無駄な足掻きはしない方が良くない？真田」

『何のことやら。……なにぶん、最近物忘れが激しくてサッパリ分
かりかねますなあ』

「とぼけるならもっと上手にしたら？寿命を縮めたいの？」

『おお、それは怖い。年寄りをあんまり苛めないでください』

「心にも無いことを言うねえ、古狸」

『本気で言っておるのですよ、この餓鬼』

(……ははっ)

僕は内心、笑ってしまった。この教師、前から底が読めないと思っ
ていたら、底にこんなモノが埋まっていたとは。

いつの間にか、心の中だけに留まらず口角が上がってしまっていた。

「あのやり取りでも笑ってる……！やっぱりブラックナガル復活？」

「……元から結構毒舌だからな」

二人のコメントは敢えてスルー。このまま会話を続けよう。

「で。どうする気かなー？僕にバレるまでが貴方の勝負だったはずじゃない？」

『……そう、ですな。そうなる前にカタをつけるのが理想的でしたな』

はあ、その言い回し。やっぱり何かあるようだ。

つまらないことは“キライ”だって言ってるのに。

「虚勢は止めておいた方がいいよ」

もう黒幕としてのインパクト自体が弱いんだから。これ以上こもの小者フラグたててもツライだけだし。

『ほっほっほ。これを見てもそんな言葉が吐けるかな？』

そう、相手は『小者』。

だから一番ベタな、“そういう展開”を予想していなかったのは僕の大きなミスだった

曖昧3セン……

ぶちっっ！！

色々ヤバイのでメールの受信音は強制介入（スペルイターセプト）します。

見ると端末には写真が。

「おいおい。どこまでベタなんだよ」

そこにいたのはやっぱりな空と海と呪われし姫君^{ミハルちゃん}

僕はそれを見て

「行つて」

「……何？」「え、ええ？」

眉をひそめるシズクちゃんと、明らかに狼狽する水無月さん

「教頭はたぶん職員室か放送室のどちらかに居るから。確率は7:3で職員室。別行動とらずに二人で行つて」

を、

一顧だにせず、僕は指示を下す。

正確には“指示”ではなくて“お願い”だけ。

「……わかつた行こう。生徒を助けるのも生徒会長^{オレ}の役目だ」

おお。流石シズクちゃん、男らしい回答をありがとう。

「水無月さんは？」

「はあ。正直意味わからないし、何がどうなってるのかもわからないし……でも私のせいでもあるんだろし……、っだああーもうっ！」

おお。何か水無月さんが大いなる宇宙意思との対話を終えた!?

「行くわ。もうやけくそよ。借り返したるわ！」

「キャラが変わってきてるけど大丈夫？」

自棄になった感もあるけど、水無月さんも了承ゲットだぜ！

「……貴様はどうするんだ？」

「んー？ちゃんと逆転の手を探す仕事はするよ？……最悪の場合、『アレ』の解放があるし」

「『アレ』？」

「あ、忘れてた。『武器』が要るときは理科室にあるから持ってって」

「まあいい。……おい、何をしている。行くぞ？」

「え、あ、はい！」

早足で実験室から出ていくシズクちゃんの、背中を追いかけて水無月さんが部屋を出ていく。

一瞬、水無月さんがこっちを振り返った。不安そうに揺れる瞳との刹那的な逢瀬^{であい}。

微笑んで軽く手を振る。

一寸キョトンされたけど、微笑みが返ってきた

これ死亡フラグ（僕）？

ガラガラ…ピシヤン。

そうして扉が閉まって暫くして。

「行った、かな？」

それを確認した後、携帯を取り出す。

ミュートにしてあった回線を復帰させると、

……僕の戦場に帰ってくる。

『……ほっほ。随分と長考でしたな。頭の切れる理事長らしくもない』

「真田。僕にはそれで何をしたいのかサツパリ伝わって来てないよ？」

『おお、そうでしたな。まだ“要求”を何も言っとらんかった』

すまんおう、と真田は本当にそう思っているかのようなトーンで言った。

「要求……？」

『“金”^{かね}ですよ』

「…………ちっ」

思わず舌打ちの一つはしたくなるセリフだろう、これは。

「あれだけの金を使い込んでおいて随分と貧乏なんだねえー。借金でもあるの？」

『今すぐ金庫からかき集めれば三桁はすぐにくだろう。高望みはせんから安心せい』

「ふーん、じゃあなに。そのはした金持って高跳びでもする気、つてどこか」

『…………餓鬼は黙って言うことを聞いておれ』

お？ようやく苛立ちを見せてきたっばい？僕はさらに攻めに出た。

「老い先短い身で高跳びしてもねえ。フィリピン辺りで女囲う気？それとも中南米とか？」

『口を塞いでサツさと働いたらどうかね？年寄りをそう待たせるものではないさ』

「ふうん、確かに。あんまりシニアの人と女子高生の図ってあんまり気持ちの良い絵面じゃなさそうだしね」

『…………ふざけておるのか？』

「いや全然。だって僕の大切な生徒に危害が及びそうなのに、一体全体どうしてそれを喜べるかな？」

『ほっ、これは意外だのう。まさか理事長からそんな言葉が聞けるとは！自己中心の鑑かがみだと聞いておったのにの』

「……さあ。ここで“理事長（本当はまだ副）”なんて肩書き背負ってる分くらいは責任感を持つてるんだよ。テメエと違ってね」

『……………』

「あーあ。もう警察呼ほんしやくんだ方が早いかな？どう思う？」

『……………ほっほ。ならばその間にこのサーバーを完全に落とさせてもらうぞ？』

「確かにそれは大変な脅しなこと」

全く。それ関係で昼間に騒動があったばかりなのに…。嗚呼、今日確かに“厄日”だよ九十九つくもさん。これもまた別の話だけだ。

『交渉の余地はないぞ？やる気が無いなら……………』

「おーい、そう急かさないでよ。あとどうしても解せないことがあるんだけど？」

『……………なにかね？』

「真田センセイだったら、僕を脅してお金を出させなくても職員室

の金庫とかなら開けられるじゃん。なのに何で？」

『ほっほっほ！』

そう聞くと、すぐにしわがれた笑いが返ってきた。

『それこそ白々しい！……知っておるのだろうか？ “理事長室の金庫の鍵”を？』

「……………」

あー…、そういうこと。“アレ”を開けるって、そういうことか。

『あれだけは儂も分からなくなてな。恐らく数十年で相当貯まっておるだろう？』

「……………」

『だんまりかの？なら、儂にも手段というものが……………』

『現金キャッシュで3000万。それで満足？』

さあ……………、どうだ。乗るのか？乗らないのか？

『ほっ、ほっ！それはまた太っ腹な采配よなあ！』

よし、乗った！後はもう一押し、か。

「カネを受け取ったらとっと失せて貰う」

『言われなくてもそうするさ。おお、それとあの資料だな』

「資料……？ああ、あれか」

『データは全て移して物理的に破壊させて貰ったからの。儂を刑事的に訴訟することは不可能じゃからな』

「……………？？」

あれ？

『印刷されて保存されていたものも焼かせて貰った』

あれあれ？あの紙、シズクちゃん持ってなかった？

……………頭の中でシナリオを構築する。

切るカードを一つゲット、か

僕はニヤリと笑って、上を見上げた。

「……………そう。じゃあ何分待てる？20分あれば準備は……………」

『10分後に玄関。でなければサーバーは停止。そして変な動きを見せれば……………出来ればやりたくないのじゃが、あの子の顔に一生残る傷がつくかのう』

「……………ちっ。2、3分の遅刻は見逃してねー？」

『ほっほ。せいせい頑張ることじゃな』

ぶち、と電話が切れた。

思考の切り換えのために息を浅く吐く。

その次の瞬間には、もう別な相手に電話をかける。

……そのコール音が聞こえる間にも、実験室を出て理事長室に向かって足を動かしている。

小脇には電話中にいじってようやくフリーズから脱した電子端末を抱え、真田の移動ルートを考える。

さらにマルチタスクで指示メールの作成、送信……と。

何処かの落とし神モード的なノリで廊下を進んでおります、綾波です。

「プルルルル……プルルルっ、ピッ！」

お、電話はようやく繋がった。

「……ふあい。こちら、あや……ふああああ……!!あれ……何だっけ……寝たい？」

「そうか。今から僕が言う仕事をしてくれたらいくらでも寝て良いぞ。……っていつかお前、そっちはそろそろ朝だろ」

「……カエデは良く寝て、もっとナイスバデーになるんだもん」

「知るか。あー、お前が駄目なら高遠たかとうにやらせてくれ。ただのデータの確認だから」

「最初からそっちにかけてなよ」

「僕がアイツを嫌いなのは知ってるだろう？」

「はふん。じゃー、なんぷんでやらせればいいのー？ふふふ？」

「途中で寝るなよ？10分、と言いたいところだが5分で頼む。内容……」

そんな風に、僕が着々と話を回していたそんな頃。実働部隊二人はとうとう……

i m a g i n a r y a f t e r (後書き)

テストが終わって二週間ほどお休みなので集中更新中。

雨のち晴れ

*

「……………」

沈黙が　痛い。カツカツ…………、と廊下に二人分の足音だけが響く。
やけくそになって出てきたものの。

(この展開は予想外よ…………)

午後9時近くの間。何故か私は前を黙々と進む会長の背を追いかけて、早足で進んでいた。

…………

…………

…

そんなに距離が有るわけでもなくすぐに“理科室”の前へ。

「……………」

ガラス、と扉を(会長が)開ける。そこで会長が急にこちらを振り返った。

「水無月茜」

そして唐突に名前を呼ばれる。

「はっ、はい！」

ええ！？何？

「帰りたいならここで帰れ。後はオレとアイツが何とかする」

「え！？」

なにそれ。ナンダソレ？

それって……、私は要らないってこと？

何事か口を開こうとした時には、もう会長は部屋の方を向き直っていた。そのまま彼女は部屋を物色して始まっている。

……………。

しばらく呆然と突っ立っていたが、忙せわししく動くその背中を見ていて、自然と言葉が沸き上がってきた。

「私も、行きます」

ピタッ、と会長の動きが止まった。そしてまた目と目が合う。

そしてあっ、と気づいた。その目が生徒会室で最後に見た“目”と同じだったことに。

「無理はするな。これは貴様の問題ではない。“学園の責任者”あやなみとオレで片をつければ済む話だ」

「っ、それは……！」

そうだ。

そうなのだ。

そうだけれど、

『それでも』と、

そう言いたかった。

「ミハルちゃんを一人にしちゃったのは私の責任だし！それに
わ、私だってナガルの役に立ちたい！」

気づくと、思ったことが勝手に口から出ていて。
すると、それを聞いた会長の眉間がさらに険しくなってる。

「やはり貴様も助けられたクチか」

「“も”？」

「……どごそのカミジョー病は貴様も同じだろうが馬鹿め」
????、会長がナガルみたいなことを呟いてる。

「あ、あの〜会長？」

「水無月」

「は、はい！」

また急に名前を呼ばれた!?

「……貴様も使えそうなものを探してくれ」

「え?……あ、う、うん」

おお、おおお?これは 認められたの?

よくわかんないから、確認しようと会長に話かけようとした時、携帯電話が鳴った。

私の。

会長からの冷ややかな視線を一身に受けながらメールを開くと、なんと送り主はナガル(初メールがコレ…)だった。急いで開くと、そこには何やら箇条書きの文が。どうやら指示みただけ……。

「ん、どうした?」

「あ、うん。そのー……」

メールの内容を会長に伝える。

すると、会長はバツ、と自分の携帯を取り出して物凄い勢いで番号を押し始めた。

はつきり言っって怖い。その鬼気迫る顔の迫力がヤバかった。

ピルルルル…という電子音の後、

「はい、綾な……」

「これはどういつ了見たこの野郎！」

キーン……。

ナガルが答える前にもものすごい声量で怒鳴る会長は普段の冷徹さからは程遠くて。

「し、シズクちゃん？クールビューティー忘れてるよー？」

「知るかこの馬鹿！貴様、こんなときにまで趣味を出すんじゃない！」

そう……なのだ。この指示というのがあまりにも……

「僕は真面目だよ？」

「お前が良くてもオレは……」

「タイミングは今しかないよ？ほら、こついつ時よく言っじゃん。

『エンディングが見えた！』って「

「貴様が最近神のみにハマってるのはわかるが、この“プラン”はどう考えても……」

「教頭を揺さぶって、ミハルちゃんを見つける時間を稼ぐにはコレ

しかないんだよ。シズクが頼りなんだ！」

今度は会長のスピーカーが『キーン』となる番だった。

……………。

息を吸って、吐き出すくらいの沈黙があって、

呆れたような声で会長が呟く。

「……………ズルいな貴様は」

「へ？何が？」

「俺もそちらにすぐ向かう。本当に上手く行くんだろっつな？」

「そりゃ大丈夫でしょ！何たって魔王（Satan）と女王（Si
zuku）の共同戦線だもん」

「……………ふ、そうだな」

「略するとSSSSになるし」

「それが言いたかっただけだろ馬鹿」

……そんな会話を横で呑気に聞く私。もの凄いアウエー感です。助けて九十九さん！と叫びたくなっただのは許される？

しかしこの二人。本当に息が合ってるなあ……。ある意味達観したような会長の横顔を見ながら、そこに一年という歳月の深さを感じてしまった。随分と話には取り残されたしね。

「んー、ゴホンゴホン」

わざとらしく会長の後ろで咳払いを試してみた。

「！ー！、じゃ、じゃあ五分でそっちに行くから！それでいいんだろ！？……じゃあ後でな」

プツン。

かなり古典的だけど上手く話は終わったようだ。はは……、と苦い笑いが出そうになったけど我慢。今は綾波の言ってるのシリアスパートなもの。

Opening of finale

*

「さて、時間が……」

待ち受け画面の時計を確認し、独り心地に呟く。片手に携帯を、片手にアタッシユケースの用意をしてようやく十分。

あとは

一万年と二千年前……

ブチッ。

これもヤバいな。ていうか主人公なのに電話ばかりじゃね？とか、思いながら電話にでる。

「はい、こちら綾波……」

「ナガル様！これはいったいどういことですか！」

「ちっ、高遠か」

電話の相手は高遠　今はカエデに付き従って執事のような真似をしている。

そいつがなぜ僕に電話をかけて来るのか。少し考えればわかる。

……カエデのヤツ、やっぱり面倒くさがって高遠に仕事丸投げしたな。

「その冷たい反応…… ああやっぱりナガル様……！」で。どうしたの？」「

ああもう、早く用件を言え！という意味を大いに込めて話を打ちきる。

「ああ、そうです！どうしたもこうしたも無いのです！サーバーは乗っ取られているわ、私のパソコンはウイルスわたくし改変されているわでもう滅茶苦茶ですよ！？」

おーおー叫ぶね。今日で鼓膜の疲労がなかなか溜まったよ気がする……。
しかしそうか。

「と、するとあのデータの価値は倍増か」

「は？データ？」

「うん。それが分かれば無問題だからもう切るね？」

「あ、待ってください！カエデ様より依頼された人物調査も終わりましたよ？」

相変わらず早いな。パソコンが死んでるのにどうやって仕事をしたの？という質問はこの際するまい。

「仕事は出来るんだよね。中身が残念なだけで」

それでも何か物申したくなつてつい呟いてしまう。

「そ、そんな！良いでは無いですか！」

気が滅入るだけなのに。

「ちょっとぐらい虐められるのが好きなくらい！」

「切る（KILL）ね」

「ああ！その冷たい言葉が好……」

ブチイイツツ！

はああああ……。

大きく大きく、これまでにないほどに息を吐いた。

ああ、くそ。何でこう、僕の周りにはキャラが濃い人間が多いんだろっ？（綾波が一番濃いからです）

僕はこんなにも普通に“愉しく”生きてるだけなのに（綾波の辞書に“普通”という言葉はないです）

そこところは吉良吉 的な感じなんですよ。杜王町にはあんまり住みたくないけど。

はあ、とまた嘆息しながらも僕は決戦場へと赴くのであった……。

L i f e i s l i k e a m e r o d y (前書き)

いつものごとくサブタイトルは本編とは全く関係ありません。Ke
y作品関連が多いのはやっぱり好きだからかな……。いろんなとこに
目移りしても結局Keyに戻るんですよ。そういうもんです人生は。

Life is like a melody

定刻。
指定場所にて。

カッーン、カッーン……。僕は背中に迫る人の気配に振り返った。

「時間通り、かな？」

「そうですね。理事長」

僕が歪に笑いかけると、似たようなモノが返ってきて不愉快になった。

嗚呼、こんなにも笑みというのは醜悪になるんだね。ある種の感慨にも似た感情を抱きながら、僕は差し出された手を見る。

「では、それを……」

「待つて。それより生徒ミハルちゃんの居場所を教えるのが先じゃない？」

一応、聞いておこう。返事は分かってるけど。

「金が先じゃな」

「あっそ」

予想が外れなくて残念だ。

「ばいっ、とアタツシユケースを投げると、不意を突かれたのか、真田は目を見開きながら受け取る。」

重さはかなりあるはずだが、落とさないところが何とも滑稽だった。

「こつも素直だと逆にあやしいのう……」

「さあ、早く教えて。ミハルちゃんが居る場所を」

そう急かすと、

「まあ待て、焦るな。中身を確認してだな……。ふむ。偽物ではないようじゃな」

「どうやら真田は納得した様子らしい。」

「ニコリと、食えない笑みを浮かべると、おもむろに紙を取り出した。」

「これは？」

僕が問うと、

「その地図の印の場所に生徒は寝かせてある。サーバーの支配も一時間後まで儂に何も起こらなければ解除しよう」

「二つ折りの薄い紙。その紙を受け取って僕は、後ろ手に持った携帯に即座に位置座標を入力、送信する。」

（頑張ってね水無月さん）

と、念じながら。

その作業の間に、

「では僕は行くからの。後始末は財団が勝手にやってくれるじゃろうからな。二度と会うことはあるまいよ」

そう言い放ち、真田は僕に背中を向けた。

さあて。

ここからが作戦だ。主賓の登場だよ。

十

パシャッ！

その瞬間、鋭い光が僕らを包んだ。

「！」「何じゃ！？」

それは　おそらくカメラのフラッシュの光。場に緊張が走る！そして目の前に現れたのは！！

「こ、この学園で悪事を働くなんで、オ、……くっ、ア、アタイが

許さんぜよー！」

おおっ。

そこには、ひとりでプ キュアなシズクちゃん（初代ブラック）が
皆の心をハートキャッチしていたのでありました。

……………。

もうこの時点で胸が一杯です。

指示通り顔に目元の隠れる仮面を着けてくれてたけれど。…………うー
ん。

「……………何かの？このふざけた輩は。理事長の差し金かな？」

「いいや違うよ？僕の知り合いにあんな真似が出来る人はいない
し」

真田に、誰なのか気づかれた様子が無いのが幸이었다。

しかしここでシズクちゃんに、『思い付きで言ったら本当にやって
くれたよ』って言ったら多分ガチで心臓貫手ハートキャッチされるのでお口にチャ
ック。

（ここはあくまでシラを切る！さあシズクちゃんももう一押しを！）

って意味を込めて目くばせすると、怒りからか羞恥から来る震えで
プルプルしていた肩がスクッと定まった。「綾波……………後でクロス…

…」という恐ろしい眩きも聞こえたけど気にしない！

「そ、そうぜよ！おまんら両方がアタイの敵たい！ この悪徳教師と、自己中変態大馬鹿アホクレイジーオタゲーマー理事長め！！」

おいおい。

僕だけ物凄いわれようだった。

しまいには泣くよ？僕の心は二酸化ケイ素98%と2%のガタリウム合金で出来てるんだからね！？

フレームだけになっても動けるようなそんなスペックはないんだからね！？

……話が逸れた。僕は前を向いて、戦場に向き直る。

「悪徳教師？何か勘違いをしとるなあ。僕は」

真田は探っているようだ。今の言葉に裏付けがあるのか、当てずっぽうなのか。

それに対する答えは明確だった。

「シラを切っても無駄だ……、いや無駄ぜよ！」

バン！と一枚の紙を取り出すシズクちゃん、もといキュブラック。

ここが一番の見せどころだからねシズクちゃん！あ、龍馬風な口調も僕の指示です。

「この収支報告書。これが全ての証拠ぜよ！」

その瞬間、僕は見逃さなかった。
真田のあの柔和に造った顔が、酷く崩れるのを。

「これはどういふことかの？理事長。あの紙は」

取り繕うことなく怒りの表情を浮かべた真田がそこにいる。対して僕がすることといえば変わらない。

「一枚だけじゃなかったみたいだね。まあコピーは常識でしょ？」

不敵に笑うこと　たとえ不確定要素ふあんが頭をよぎっても。だってそれが僕の“戦い方”だから。

「そうか、それが答えか？」

「答え？さあて、なんのことかな」

「サーバーも生徒も惜しくないようじゃのっ！」

っ！自棄を起こすか！？

一瞬、ひやりとしたものが背中をよぎる！

「待つぜよ！アタイの敵はおまんら両方と言っただらうが！」

シズクちゃんが珍しく声を荒げる。しかしその静止は真田には届かない。

「知れたこと！こうなった以上何枚その紙があるかわからん！この交渉はその紙が抹消されていたからこそ成り立つものじゃ。ならば

……！」

懐から何かを取り出そうとする真田。

ここは　カードを切る！

「全部無くす気？真田、キミの家族のように」

「　っ！！」……なに？」

空気が、止まった。

真田のシワのある目元は大きく見開かれ、その驚きを大いにたたえていた。

「それを……知られておるとは思いませんでしたなあ」

だが、その“揺らぎ”も一瞬で直ぐに造られた顔に変わる。そこに僕は、何か暗い、“意地”のようなものを感じた。

「学園がくえんに対しての個人情報は大いぶ改ざんしたみたいだけど、外からつけば結構分かるさ」

「……ほっほ、そうかそうか。それは迂闊うがたでしたなあ」

おどけたような、そんな軽い口調の真田。老人の鎧は思ったより固い。ここはもう一つ

「離婚の原因は仕事で家庭を顧みない姿勢による不満。……あの金は慰謝料にほとんど使ったようだし。悪かったね。遊んで使ったみたいない方して」

ニコリ、と笑みを足すことも忘れずに。視線を切らさずに畳み掛ける。

手持ちカード二枚目。ここで少しでも真田を揺るがしたい所なんだけど……。

「それが今、何か関係あるののか？」

んー、駄目か。

「いや。家庭を壊す男ってのはどいつも気に入らない野郎だと思っただけだよ」

でもこのカードはだいたい真田を落ち着かせるには役立ったのかな？言葉を交わして多少は冷静になったのか、さっきのような自棄を起こしそうな気配は消えていた。

「……………」

そのかわり真田の表情は消えて、後は“睨みあい”だった。

位置を確認すると、僕がいて、その前に真田。そして真田を挟むようにシズクちゃん。

人数と体力的にこちらが圧倒的に有利だけど、

“まだ”、……水無月さんからの連絡を待たないと。

そんな算段を働かせていた矢先、事態が動く。

「！うわっ！？」

「なっ！？」

いきなりだった。真田が猛然とキュアブラッ に突進したのは！！

「あっ！？」

^{まはた}瞬きする程度の時間にそれは起こった。

なんかストファイのインドのお方を思い出すような動き。

「いやいやそれはないでしょ！」と、思わずツッコミたくなる光景。

ビリイイイ！！

そんな音が響いて、そして次の瞬間には。

シズクちゃんの手に残ったのは紙片の端で、真田は紙の大部分を手
にしていた。

「っ！真田あっ！」

「年寄りだからと甘くみられても困るのう」

その動きはケースの重さを感じさせないような俊敏さで、不意を完全に突かれた僕は見過ごすより他になかった。

“僕は”、だけど。

「っ！！くっそおおお！！！」

シズクちゃん、もといキアブラックの振り上げた足が、

バチンっっっ！

真田の、ケースを持つ手を直撃する！！

「痛っっ！」「綾波！ケースをっ！」

おお！流石、主役の活躍っばい！

「そして僕は地味に奪取」

ケースをがっちり掴んで少し距離を取る。某愛染様と違えば間合いも意味を為すよね。

「よし！いいぞ綾波！」

シズクちゃんもこちら側に下がって完全に2対1のフォーメーションになる。

「……まったく。最初の三つ巴を装う計画、ガン無視なのね」

「もう状況が違うからそれは良いだろ？」

目元の仮面を捨てるシズクちゃん。

「それよりさっきのは何だ？『僕の知り合いにあんな格好が出来るやつはいない』、だったか？……よっぽど死に急ぎたいようだな」

「ちょ、待って！？シズクちゃん今はそれを蒸し返す時じゃ……ああもう目が据わってらっしゃる！？」

あれこんなところで絶体絶命！？朽ち果てるの？己の身を呪えばいいんですかハマーン様！？」

「痴話喧嘩はそのくらいにしてもらえるかの？」

この時ばかりは真田に感謝？だった。

「ほら真田センセも怒ってるから離してくださいさね」

「あ、ああ。だが後で覚えておけよ」

手をボキボキ鳴らしてたけど、何とかシズクちゃんは離れてくれた。

寿命が延びたーっ。

なんて言ってもらえるのは一瞬だけだった。

「……謀りおつて。儂が本気で何もしないだろうとタ力をくくっておるのだらう？馬鹿にするでない！」

パツと、真田が取り出したのは何やら古風な押しボタンで。

「これを押せばサーバーも、データも終わりだからな」

……………。

んー、あんまりも安直過ぎて逆に新鮮かもしれない。この学園には
典型的悪役育成の土壤でもあるのかな？
ディンプレートビル

「貴様がそれを押すはずがない。それは貴様の身を保証する唯一の
武器なのだろう？ だったら」

「ああそうよな。だが裏を返せば“交渉”にはコレ一つで十分とい
うわけよのう？」

この口振り。まるでほかに何か別の仕掛けがあるかのような言葉。
……………まさかとは思いたいけど。

「真田、お前ミハルちゃんに何か仕掛けたな？」

「ほつ。僕の合図で作動する仕掛けをちよつとな」

真田の手にはいつの間にか、ボタンとは別に携帯電話が握られてい
た。

「僕の電話一つで、あの子には一生残るような傷がつくだろうな」

ふむ……………そうか。単純な悪役に見えて喰えないトコはちゃんと喰え
ない、ってことね。

「貴様……！いい加減にしろ！？どこまで生徒を裏切る気だ！！」

シズクちゃんの激しい怒鳴り声。

それは

「ほっ。そうやって激昂されても困るからうつ、言わなかったのだから」

真田には届かない。

L i f e i s l i k e a m e r o d y (後書き)

ラストバトルようやく開始です。更新が滞っていたのは単純に忘れてた…、とかじゃなくてえと、いろいろ忙しかったからです。本当です。

次話もすぐに更新したいと思っておりますのでお待ちを。

disillusion

*

ヤツの言葉によって自分の中で激情が渦巻いて。

怒りで頭が真っ白になるといつのを初めて体験して。

抑えきれなくて。

俺は叫んでいて。

……でもヤツは冷たく口元を歪めるだけで。

それを見て、

前へ、強く踏み出しそうになったが、綾波に肩を掴まれて止められた。

俺はそれが理解出来なくて、綾波を睨み付けて何事か言おうと口を開きかけた。

そこで気づく。

綾波の口が『ダイジョーブ』と動いたことに。

……………。

『ダイジョーブ』だと逆に成功率が50%以下な気もするから、『大丈夫』だったと信じたいが。

俺は綾波に手を引かれ、肩を抱かれて（！）真田に相対した。

「真田。それを押したら完全に結末に救エンディングいが無くなるけどいいの？」

綾波が、俺が見たことのない眼をして、“そう”聞いた。

そして答えは、

「黙れ餓鬼め。儂を侮ったからには現実を見せてやるっ!」

歯を剥くようにしてそう言い放った教頭に普段の面影は無く。豹変に対する失望の念しか浮かばずに。

「それが貴様の答えか」

独り心地に呟いて、

拳を握りしめる。

歯を噛みしめる。

綾波に掴まれていたければ、殴りかかるのを抑えられそうになかった。それもほんの数瞬のことだったが。

「……この世の中には不条理が満ちておるのだよ」

真田の親指が、携帯電話に触れる

「止めろっつっ!」

俺の制止はヤツには

「あー、ちよい待ち」

*

「……なにかの？ 儂は何を言われようとコレを……」

まだ真田は余裕そうな顔だ。ああ、胸くそ悪いこと。

「カチツと押すんだろっけどそれもう良いよ。お前の意思は分かったから。だから黙って交渉につけ三下^{さんした}が」

お前に前回のような慈悲はやらないから。エンディング後の裏チャプターは滅亡型だろうし。

「何を言っておるのか儂には意味が……」

「カチツ」 『フハハハ儂に逆らった罰じゃ！』 『な、なにい！……的なフラグ見え見えだから割愛しようと思って』

「なん、だと？」

おお。こんなところでそれを聞けるとは。

「ていうことで現場の水無月さん。仕掛けの解除は終わったー？」

『……あ、もう私、喋って良いの？』

戸惑った感じの水無月さんの声。

まあ、回線繋ぎっぱなしで物音たてるなって指示されてれば、その反応は間違ってるないね。

「なっ、綾波お前！それを早く言え！」

「怒らないでよシズクちゃん。時間稼ぎはちゃんと完遂出来たんだからそこは多目に見てよー？」

「あ、ああ……。だ、だが俺だって胆が冷えるんだぞ馬鹿野郎！」

「いたっ！だから暴力は止めて！僕、直接打撃には滅法弱いんだからー！」

向こう脛を蹴るのは駄目だと思う今日この頃。

……何気に頑張ってるよね僕も。でも何で今回はこんなに余剰ダメージを喰らうのかサッパリなんですが！

と、いう心の叫びはさておいて。僕は真田の方へ向き直った。そして顔を見る。

その顔は、

羞恥からか、

怒りからか、

絶望からか、

呆れからか、

自嘲からか、

はたまた、ある種の感嘆にも似た感情からか。

“そんなような”、顔をしていた。

そして、僕はまたその方向に『笑み』を向ける。真田にとって、全くその圧迫感プレッシャーが前の比では無いことを自覚しながら。嗚呼、ようやく愉しくなれるかもね。

「さーなーだくん。交渉にカードが一つで十分なのは僕も同感だよ」
さて、交渉に入ろうか。

「でもそれ1つじゃこのカネには見合わないと思わない？」

「あ、阿呆が。コレを失えば損失は、それこそ億を超えるのだぞ？
どうして僕が折れねば……」

「でもその場合、お前を守るモノは無くなるし。その後の財団の処罰の“怖さ”、知らないお前でもないでしょ？」

「だが……」

納得はしていない。だが揺れている
情報なんて、取り返しの効くものが交渉物なら僕も気にせず“戦える”。

これが作戦？。

まあ。これも時間稼ぎと保険、っていう扱いになるんだけどね。

(さあ、頑張ってくれるかな？ミハルちゃん？)

時は少しさかのぼって。

*

眠い、です。

肩を揺さぶられて起きたとき、頭に浮かんでいたのはそんなことでした。

「……ん。……ちゃん。…ルちゃん！ミハルちゃん！」

誰かに呼ばれて、るです？

「……んにゅ……。まだ寝かせてくださいです……」

「あっ！！ミハルちゃん！お願いだから起きて！」

女のヒトのこえ？

「おかあさん、ですか？」

「は？あ、もしかして寝ぼけてる？」

「うー、復活の呪文は暗記してないですよ？」

「はい？」

「あそこにスクープが舞ってるです！」

「……完全に寝ぼけてるわね」

*

……………。

こんなやり取りが一寸ちよつと続いて。ようやくフワフワした状態からまともになって来たけど。

無事で良かった、と心から思う。

ここに来た時、聞いていた『仕掛け』 吊り下げられた何か（中に液体入り）、繋がった携帯電話、そばに眠るミハルちゃん、を見たときを は心臓が止まるかと思ったけど。

（本当に大丈夫で良かった……）

と、思っていたの束の間。

「新聞王に、ボクはなるんです……ふふ、にゃふふ……」

この場にナガルが居なくて良かった、と私は思った。

(『寝惚けた後輩の女の子』なんて……言葉にただけでも危ないもの！)

同性の私から見ても今のミハルちゃんは『ヤバい』です。

(うーん……やっぱりナガルもこういう『可愛いらしい』子が好きなの、かな?)

ナガルは何かみよーにミハルちゃんに対して優しい気がする。私に対しては結構雑なのに。

(っ！いやいやそんなことは今は関係ないし!!)

ああでも、会長とは長い付き合いなんだ、って雰囲気バリバリだし。割って入るにはかなりハードルが高いし。

(いやいやだからそれは関係ないんだから！ああもう、考えるな)

何だかよくわからない考えを抱きながらも介抱をする私。

例の液体入りガラス器具？は遠くに撤去して、ミハルちゃんを近くにあった椅子(ゆったり型)に座らせた。

ここは数学教員用の準備室だから、多分真田先生の椅子だけどそんなことは今更気にしてられない。

すると、その衝撃が分かったのかパチリと、その目が開いた。

「あ、………起きた？」

「……うに。はい、イクラです」

「ぶっつっ！」

思わず吹き出してしまった……。

小さな妹がいる人の気持ちってこんな感じなのかな、って一人つ子の私は思ったりして。

何となく髪を撫でると、サラサラと指通って凄く気持ち良かった。

あれ？和んでる暇なんてあったっけ？

「……水無月、先輩？」

と、タイミングよく今度ははっきりとした声。

「ミハルちゃん。痛いところはない？目眩とか気持ち悪さとかそういうのも大丈夫？」

「あ……、はいです。まだ少し眠いですけど」

「そっか。私のせいでこんなことになったんだし、謝らないと駄目よね」

「ごめんなさい、と頭を下げる。すると、

「え？何のことですか？」

……。

もしかして。

「どうしてここに居るのが覚えてないの？」

「はい、です？……あれ？ボク、さっきまで生徒会室にいた気が……あれあれ？」

覚えてない、のかな？

それはそれで良かったのかもしれない。もしも、恐怖感とかが残ったら大変だし。

「だったらいいの。私達は後は時間が来るまで待つだけだし」

「時間、ってなんですか？」

「あ、うん。それは……」

ピロロロリン

「あ、このタイミングなのね……」

ピッ、と携帯を見るとナガルからの指示メール。

「なにになに……『これから掛かってくる電話を繋ぎっぱなしにしておいて。音は立てないように』、か。……なんだそれ？」

「あ、あのこれは一体？」

そっか。不安そうな顔になるミハルちゃんを見て思った。

起きた途端に目の前でこんな風にされたら、ミハルちゃんが戸惑うのも仕方ないものね。

うーん、じゃあ何て言っただけ誤魔化せば？

「水無月先輩？」

「あーうん、その……あ！」

その時の閃きは思い返してみてもあまりにお粗末で。

「ゲ、ゲームみたいなことなの。何かナガルが仕掛けてたみたいなの！うんドッキリ！」

うう……、何で私がこんな苦しい言い訳を！

「ゲーム、なのですか？」

「そ、そう。今はそれで戦ってる最中、みたいなの？」

「そうですか……」

キ、キツイ……。大丈夫かなこんな言い訳で？流石のミハルちゃんでもこの不自然さには……。

「楽しそうですね！ボクもゲーム好きなんです！」

ゴンっ！

「????、どうしたんですか壁に頭をぶつけて？」

「いや、ナガルといると個性に溢れた人にしか会わないなって」

はあ。

何はともあれ何とかなった、のかな？ ホツと息を吐くと、ちょうどその時にまた電話が鳴った。

ポチ。

『ザザ……のか……が……た……』

繋がった、のかな？ 何か喋り声が聞こえるけど断片しか聞こえない。一体ナガルは何を……？

『これが全ての証拠ぜよ！』

「っ！？」

と、思ったら急に聞こえてビックリして。ついでに悲鳴を出しそうになってしまった。

物音をたてないっていうのも結構大変かも。

(うわ、しかも本当にやらされてるし……)

あの“指示”メール……、完全に悪ふざけですよ。

それでもやってくれる会長を、何だかある意味見直してしまった。

それから断片的な音は続き。

『っ、真田あつ……』

『ガタンっっ！』

『綾波！ケースを！！』

（ええ！？なにになに一体どうなったの！？）

『……一生残るような傷が残るだろうよ』

（っ、サイテー……）

『止めるっつ！！』

（きゃあ！！会長カツコいい！）

以下略。

そんな感じで、聞き役に徹していた私。

だから急にナガルに話を振られた時にはもう、心臓がドキーンとなつて何だか本当に大変だった……。

*

「そして今に至る、のかな？」

「ボクに言われましても……」

ナガルからは、電話が切れると同時に二通目のメールが来ていた。

内容を読む。

.....。

そしてしばし言葉を失う。

いや、理解出来る内容ではあるわけだけど。会長みたいにアホな指示なわけでもないし。だけど

（『生徒会室のパソコンからサーバーの支配権を奪取せよ』、って）
どこの高校生ならそんな芸当が出来るの？

「私達を何者だと思ってるのよ。ただの女子高生だっていうのに……」

「どうしたんですか水無月先輩？」

「あ、ミハルちゃん。それが……」

かくかくしかじか。かいつまんで説明すると、

「えーと……、それがこのゲームの最後のミッションなのですか？」

「あ、うん。多分」

するとこの子の反応はとてつと、

「それは……燃えますね」

「燃えるの!？」

「これはやはりアレですか？失敗すると月曜日がブラッティになった

り、世界が友 党に支配されたりする感じですか？」

「え……？あ、そうかもね」

「それならやっぱり燃えるです！七不思議も大事ですが、ここは頑張ってミッションをクリアしましょう水無月先輩！」

「あ、う、うん」

眠そうな様子は何処へやら。ミハルちゃんにあのハイテンションが戻って来ていた。

私はもう一度メールの全文を見直す。

『ラストミッション』生徒会室のパソコンからサーバーの支配権を奪取せよ』 P S ・ ヘルプの場合は下記番号まで。 080 - **

* - * * * * * 『

(…… まあ、やるだけやってみるか。一応助けはあるみたいだし)

というところでそそくさと生徒会室に移動です。

disillusion (後書き)

バトル中です。あと2、3話は続くのかな。サクサク更新します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3565r/>

生徒会室の、女王。～ The World Around You ～

2011年10月16日17時59分発行